

## IV. 考察

### 1. 研究全体における傾向と課題

#### 1) 研究内容に関する傾向

##### (1) 研究内容の傾向

認知症介護研究における研究内容の傾向は、生活支援・ケア全体、療法、BPSD、家族、心理、環境支援、評価法、ストレス・負担感に関する研究数が多い傾向にあり、発表時期も1980年代から実施され、これらの分野における研究成果の量的な蓄積は進展しつつあることが伺える。環境支援については、1990年代から発表されているが、1998年頃から急増しており、認知症介護分野においては比較的新規のテーマであるにも関わらず増加傾向が顕著である。これらのテーマに関する研究の特徴としては、認知症に限らず高齢者研究において比較的早期から研究が着手されていること、そしてストレス・負担感や評価法等のように研究評価手法が確立していること、家族や環境支援などのように対象に関する研究統制がしやすく研究対象の確保が容易であること、療法などのように方法モデルが古くから存在していること、生活支援・ケア全体、BPSD、心理・心的過程などのように認知症介護実践においてニーズが高いことなどが挙げられる。しかし、研究量が多い事が研究成果の質を保障することと捉えるのは早計であり、これらのテーマに関する理論や方法の標準化が確立されているか、詳細な内容分析が必要であろう。

一方、権利擁護、虐待、若年認知症等の比較的新しいテーマについては研究数が少ない傾向がみられており、今後の更なる発展が望まれる。そしてマネジメントや人材育成、ターミナルケアについては、テーマとしての新奇性はないが、認知症介護の研究テーマとしては希少であり、これらの研究への一層の取り組みが重要であると考えられる。

##### (2) 年次推移の傾向

認知症介護研究における課題は、介護実践上の課題のみならず高齢者福祉や高齢者関連施策の方向性など社会的な要請によっても少なからず影響を受けており、多くの研究が公的な研究助成を基に実施されることを鑑みれば、認知症介護に関連する社会的な情勢と研究数の関連は相関の高いものと予測できる。認知症介護研究数の年次推移の傾向は、1988年から1996年くらいまでに少しずつ増加し、さらに2000年前後くらいから増加を始め、2000年以降急激に増加している。認知症介護に関連する施策や事業との関連からみると(表IV-1参照)、1986年には厚生省において痴呆性老人対策推進本部が設置され、翌年の1987年には特別養護老人ホームにおいて痴呆性老人介護加算が創設されている。その後も1988年痴呆性高齢者用デイサービスの促進、痴呆性老人専門治療病棟設置、1989年ゴールドプランの策定、1993年には痴呆性老人対策に関する検討会の設置、痴呆性老人の日常生活自立度判定基準の作成、1997年には痴呆性対応型老人共同生活援助事業の創設、1999年ゴールドプラン21において痴呆性老人対策の推進が掲げられている。つまり我が国における認知症対策が本格的に始動し始めた時期が1980年代後半から2000年以前くらいであることを考慮すると、この時期の研究数の緩やかな増加は施策動向や社会的な要請によって後押しされた結果であると推測される。特に2000年に施行された介護保険制度を起点とし、2003年の高齢者介護研究会報告「2015年の高齢者介護」、2004年の痴呆から認知症への改名、2005年の介護保険法改正に関連する地域づくり事業の開始、2006年以降の権利擁護関連事業、地域支援体制構築事業、認知症介護関連研修事業、若年認知症対策、地域連携関連事業等の創設や実施など認知症介護を取り巻く社会的な動向はめまぐるしく変動し、高齢者福祉施策の中心ともいえる課題となってきた。研究数もそれらの動向に供給するように急増の傾向を示しており、年次推移の傾向を大きく分類すれば、1980年代から実施されている古いテーマ、1990年後半から2000年位にかけて実施されているもの、2000年前後から急増しているもの、2006年前後から増えているテーマ、2009年くらいから徐々に増えているものと段階的に捉えることができるだろう。研究内容別の研究数の推移は社会的な背景に大きく影響を受け、認知症介護に関する課題への関心度や重要

表Ⅳ-1 認知症高齢者施策及び関連事象の年表

実施年	施策及び主な事柄
1980	ばけ老人を抱える家族の会発足 公衆衛生局精神衛生課による認知症高齢者実態調査
1981	
1982	老人精神保健対策に関する公衆衛生審議会から答申→痴呆疾患の予防及び普及啓発活動の推進 老人精神保健相談事業
1983	老人精神衛生相談窓口の設置 老人精神衛生相談事業の実施 デイサービスに家族介護者教室が加わる
1984	特養痴呆性老人処遇技術研修 痴呆老人電話相談事業 痴呆老人の短期保護事業 痴呆老人に配慮した特別養護老人ホームの整備
1985	
1986	厚生省、痴呆性老人対策推進本部設置
1987	高齢者サービス総合調整推進事業 特養における痴呆性老人介護加算創設
1988	痴呆性高齢者用デイサービス促進 精神病院：痴呆性高齢者用デイケア施設整備 精神病院：痴呆性老人専門治療病棟 老健：痴呆加算承認施設
1989	厚生省による痴呆疾患対策調査研究事業 ゴールドプラン策定 老人性痴呆疾患センター
1990	老人福祉等八法改正
1991	老健法の改正：老人訪問看護制度ねたきりゼロ作戦 ショートステイ：痴呆性老人加算 精神病院：痴呆療養病棟 老健：痴呆専門棟創設
1992	医療法改正 E型デイサービス創設
1993	痴呆性老人対策に関する検討会の設置 痴呆性老人の日常生活自立度判定基準の作成
1994	21世紀福祉ビジョン報告書 養護老人ホーム痴呆加算
1995	高齢社会対策基本法
1996	介護保険制度大綱 公営住宅法の改正
1997	介護保険法制定 痴呆性対応型老人共同生活援助事業創設

実施年	施策及び主な事柄
1998	高齢者に関する保健医療制度のありかたについて 介護支援センター 痴呆対応型老人共同生活援助事業施設整備補助
1999	ゴールドプラン21：痴呆性高齢者支援対策の推進 身体拘束ゼロ作戦 社会福祉基礎構造改革について 地域福祉権利擁護事業 高齢者痴呆介護研究研修センター整備
2000	介護保険制度施行 成年後見制度 生きがい対応型デイサービス事業 介護予防・生活支援事業創設 痴呆介護研修事業開始
2001	
2002	特養：ユニットケア施設補助
2003	厚生省老健局長による私的研究会「高齢者介護研究会」 2015年の高齢者介護報告
2004	厚生省：痴呆対策推進室設置 痴呆に替わる用語に関する検討会→認知症へ
2005	認知症を知り地域を作る10カ年事業 認知症を知る1年キャンペーン事業 介護保険法改正 地域密着型サービス創設 老健：認知症ケア加算、認知症短期集中リハビリテーション加算
2006	認知症対策等総合支援事業 地域支援事業の創設 高齢者虐待防止法施行
2007	高齢者権利擁護等推進事業創設 認知症理解・早期サービス普及促進事業創設 認知症地域支援体制構築等推進事業創設
2008	厚生省：認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト 認知症対応型サービス事業管理者等養成研修事業 認知症ケア高度化推進事業創設
2009	介護保険介護報酬改定 認知症ケア多職種共同研修・研究事業創設 認知症対策普及・相談・支援事業創設 認知症対策連携強化事業創設 若年性認知症対策総合推進事業創設 若年認知症専用コールセンター設置 認知症連携担当者の配置 若年認知症利用者受け入れ加算創設（介護報酬改定） 特養：認知症専門ケア加算 地域包括ケア研究会報告
2010	権利擁護強化事業創設
2011	市民後見推進事業創設 市町村認知症総合推進事業創設 都道府県認知症施策推進事業創設 認知症にかかる地域資源の連携についての検討事業創設 厚生省：認知症施策検討プロジェクトチーム設置

度、必要性と関連しているものと推測できる。

研究内容別の年次推移傾向については、社会的な背景との関連が強く関連する施策施行や事業開始年が新しいテーマほど近年の増加が著しい傾向が見られている。BPSD、身体介護、生活支援・ケア全体、コミュニケーション、療法・アクティビティ、家族、施設ケア、評価法に関する研究は1980年代頃から徐々に実施され始めており、2000年以降認知症対策を含む高齢者関連研究の増加に伴って急増している。これらの研究内容は、認知症介護における中心的な課題であり、認知症介護研究の中核を成すものと捉えることができるだろう。1980年代から創設されてきた痴呆性老人対策施策と連動して着手されてきた研究テーマであり、20年から30年間の研究実績が蓄積されている領域であるといえる。つまり研究の成熟度からみると何らかの一般法則や介護方法のモデル確立、標準的な介護方法の体系化等が進展しつつあるテーマと考えられる。一方、ターミナルケアや若年認知症、リスクマネジメント、虐待、グループホーム、人材育成・教育等に関する研究は比較的最近増加しつつあるテーマであり、特に近年の権利擁護事業の創設、高齢者虐待防止法の施行、地域密着型サービスの創設、グループホーム事業の開始、研修事業の開始、若年認知症対策事業の創設、地域における医療介護連携システムの推進等と強く関連しており、社会的なニーズと不可分の関係を示している。

これらのことは、国の認知症対策事業や施策方向性と認知症介護の研究内容の増減は関連しており、研究者の多くが公的な助成による研究を実施している傾向が高いことから、国の助成テーマによって研究内容は強く影響をうけていることが考えられる。つまり研究者によるニーズや認知症介護実践上の課題によって研究内容が決定されるよりも、認知症対策の方向性によって研究内容が決定される傾向が強いと考えられる。今後は、認知症介護現場や研究者の必要性によって研究の方向性を牽引することが課題であろう。

## 2) 研究方法

### (1) 実態把握的、探索的研究の傾向

認知症介護に関する研究の発展において、実態把握を目的としているのか、探索的にモデル検証や生成を検証しているのかを把握することは重要なことと考えられる。研究のプロセスは例外を除いて実態把握を起点に、原理や法則等の仮説やモデルを設定し、検証し、応用実践に活用していくプロセスをたどるのが通例である。その意味において認知症介護研究の傾向を捉えると、全体的には探索的な研究の割合が7割弱と実態把握的な研究の倍となっており、この領域の研究が徐々に現状把握から、仮説生成や介入によるモデル検証に研究が以降しつつあることが伺える。厳密な仮説検証的研究は見られなかったが、この分野においては、断定的な仮説が想定しにくく、理工学分野における実験法のような厳密な仮説検証は困難であることが伺える。研究の目的は端的に言えば、対象事象に関する一般性や法則性の発見と社会還元であると考えられる。基礎的な研究分野において事象に対する原理解明や、実態把握に終始しやすい研究があるとしても間接的にはその結果が何らかの有益性をもって活用されることに意義があると想定すれば、仮説検証に固執するよりも別の方法を模索することが課題であると考えられる。

年次推移から研究数の増減をみると1995年以降から探索的な研究が実態把握的な研究数を大きく上回り急増しており、年次推移の傾向としては、両タイプとも2000以降から急増している傾向がみられている。つまり、量的な増減としては実態把握的な研究よりも探索的な研究数の方が増加している傾向がみられるが、年次推移の傾向としては同様の傾向を示しており、おそらく認知症介護に関する新たなテーマが出現するごとに実態把握的な研究も増加していくと考えられる。

研究の内容別には、若年認知症、ターミナルケア、地域関連研究について実態把握的研究が相対的に多い傾向がみられる。これらは比較的新しいテーマであることから現状の把握を目的とした研究数が多くなる傾向にあるといえる。デイサービス、身体介護に関する研究についても実態把握的な研究が多いが、これらは早期から着手されているテーマであるにもかかわらず実態把握

的な研究が多く、研究の成熟度が未成熟な領域なのか、研究で捉えようとする事象が常に変動し、実態把握が困難なテーマであるのか詳細な分析が必要である。一方、療法、アクティビティ、評価法、環境支援、ストレス・負担感、家族については実態把握的な研究は少ない傾向にあり、このテーマの研究方法については一定の方法モデルが確立しており、実態把握よりも方法モデルの生成や検証の段階である可能性が高いことが推測される。

## (2) 定性的、定量的研究の傾向

研究全体の傾向としては定量的な研究が77.69%と定性的な研究数を大きく上回っている。定量的な研究と定性的な研究数について年次推移をみると、1998年くらいから定性的な研究件数が増加し、研究件数の割合推移では両タイプ同様の増加傾向を示している。この事は認知症介護研究において、定性的な研究が原著論文として認められつつあり、また、量的な研究では捉えきれない側面を質的な研究が補足している傾向がうかがえる。昨今では介護や福祉領域において事例研究を代表とした質的な研究の重要性が再認識されてきており、両方法の特徴を活用しながら研究が実施されてきている傾向がみられている。

研究内容別には、評価法やストレス、身体介護など評価尺度が確立されつつあるものについては定量的な研究が多く、権利擁護、若年認知症、虐待、ターミナルケアなど比較的新しいテーマで実態が不明であり、実態把握が必要なもの、グループホームでの生活支援、コミュニケーション、心理など数量化しにくいものについては定性的な研究が相対的に多い傾向がみられている。定性的な研究方法の年次推移傾向は、ケーススタディが1980年代より実施されている定性的な研究方法の代表的なものであるが、内容分析、会話分析、グラウンデッドセオリーなどの方法が2000年以降から急増している傾向がみられている。

定性的な研究は質的なデータを対象とする場合が多く、分析の展開も研究者の主観に依存する傾向が強いが、数量化しにくい事象を捉え体系化し、対象事象に関する因果や構造に関するモデル構築に有用である方法である。定量的な研究と定性的な研究の関係について、長田<sup>(2)</sup>は定性的な研究によって得られた記述的事実と定量的な研究より得られる理論や法則は一見相容れないように見えるが、特に実践科学における分野の研究については、両者が相互補完的に機能し研究成果の質を高める事の重要性を指摘している。長田の指摘は、感情や心理等の客観的な計測が困難な要素を対象としていたり、又、それらの要素が認知症高齢者の行動や、介護方法に密接に関係している事を踏まえれば認知症介護研究において定性的な研究の意義は重要であると考えられる。

## (3) 研究方法

認知症介護研究において実施されている研究方法の傾向は、全体的には質問紙法による研究が3割と最も多く、面接法、観察法、実験(介入)法が2割弱と同程度の割合を占めている。実施されている研究方法の年次推移傾向は、質問紙法が1980年代から実施され2000年以降より急増している。その他の方法は2000年前あたりから増加しており、質問紙法による研究は早期より実施されている傾向にある。近年、認知症介護研究の増加に伴い増加する傾向にあるが、その他の研究方法も増加していることから、認知症介護研究における方法が多様になってきていることを示している。研究内容別に研究方法の傾向をみると、質問紙法は全体において実施されているが、療法やアクティビティについては、介入的な研究が多い傾向にある。虐待、ターミナルケア、若年認知症、権利擁護などの新しいテーマや、家族、ストレス・負担感、心理・心的過程などはインタビューによる方法が多く、コミュニケーション、環境支援、身体介護、グループホームなどは観察法による研究が相対的に多い傾向がみられている。これらの傾向は研究対象テーマに応じて研究標的が定量化しやすいか、定量化の方法が確立されていることが要因として考えられ、逆に定量的な方法では研究標的が捉えにくいテーマについては、面接や観察によって定性的な記述や詳細な実態把握が有用であり、認知症介護研究においてそれらのニーズが高まっている傾向が推測できる。

分析方法の傾向は、単純集計、クロス集計の実施数が多いが、これらの方法を実施していない研究も多く見られており、定性的な研究による記述データを定量的に扱わない研究の増加によることが原因であると思われる。検定に関する分析の実施数も比較的多いが、質的な分析を含むその他の件数も多く、認知症介護研究の分析方法の傾向は検定や多変量解析など普遍化や一般化を目的とした研究以外の研究の増加を示している。

### 3) 研究対象者の傾向

研究対象範囲として全国を対象とする研究が5.38%と少ない傾向が見られており、地域性の影響要因を考慮しない研究が多いことを示唆している。原因としては、そもそも認知症介護研究全体が介護方法の標準化や法則性の発見を目的としている研究が少数であるのか、あるいは全国対象の研究における実施上の制約によるものが原因かは詳細な検証が必要である。研究対象群数については2群以上の比較群を設定している研究数が3割弱であり、7割強は1群を対象としている。認知症介護研究において比較群や統制群を想定するような仮説検証的な研究が少数であることを示している。

研究対象者の属性傾向は、高齢者を対象とした研究が6割を占め、そのうち7割が認知症であるが、原因疾患としては不明なものが8割を占めている。認知症介護研究において疾患を特定した研究が少数であることを示唆している。高齢者の所在は、施設入所者、入院者の割合が6割弱であり、自宅高齢者の倍となっている。高齢者の属性別の所在では、認知症高齢者の6割強が施設入所者、病院入院者であり、自宅所在は3割弱であった。在宅における認知症高齢者を対象とした研究が少ない傾向がみられている。認知症における非薬物療法研究の課題について齊藤<sup>(1)</sup>は、研究方法の統制に関する困難さを指摘している。齊藤によれば認知症における研究は、研究実施場所が福祉施設や病院等に偏りがちになる傾向があり、施設入所者や入院者を対象とした研究は高齢者の生活や治療が優先され、研究遂行を優先とした統制が困難であると述べている。そして在宅に居住する高齢者を対象とする研究の場合は、自宅生活での種々の影響要因を把握し統制することは一層困難であることを指摘している。また、研究標的が高齢者の行動や認知を対象としている研究に比較して、感情や刺激に焦点をあてた研究の方がよりその傾向が強いと述べている。齊藤が指摘するように所在がいずれにしろ研究場所や研究方法を完全な要因統制に基づいて実施することは、認知症介護研究の様な場合困難である。本研究においても、在宅に居住する高齢者の影響要因の把握よりも施設入所者や入院者の方が把握が容易であることからすれば、施設入所者や入院者が対象者として多い要因として考えられる。このことは、一方で自宅に在住する認知症高齢者の研究は少数であり、自宅在住の認知症介護研究遂行にとっては大きな課題と捉えることができるだろう。

研究対象として介護職等の専門家の種別傾向は、介護職や看護師を対象とする割合が7割以上を占めており、ケアマネージャーや医師、相談員、ヘルパーを対象とする研究は1割に満たない。認知症介護に関する研究を対象としているため、介護に携わっている介護職員や看護師を対象とする研究が多いことは当然であるが、認知症介護において昨今、重要なテーマとされる地域ケア体制整備や医療と介護の連携体制の構築、在宅での生活継続を可能とする在宅サービス連携システムの充実等を考慮すると、医師やケアマネージャー、相談員を対象とする研究が重要となることが推測される。

## 2. 研究テーマ別の傾向と課題

### 1) 認知症介護手法に関する研究

#### (1) 身体介護やターミナルケアに関する基本的な介護方法に関する研究の傾向と課題

食事、入浴、排泄、睡眠等の基本的な生活行為への対応やターミナルケアに関する研究について整理すると、口腔機能や口腔ケア関連、栄養や摂食、嚥下機能関連、睡眠障害への対応、ターミナルケア関連、その他に分類された。口腔機能や口腔ケアに関する研究は口腔内の状態や機能、口腔ケアの方法、生活自立度との関連に分類され、栄養や摂食、嚥下機能関連の研究は、摂食食

物や栄養状態、機能障害のアセスメント、援助方法の検討や評価に分類された。

口腔機能や口腔ケアに関する研究は、残存歯数や義歯使用率と認知機能との関連を検証したり、口腔ケアの自立度と認知症の重症度の関係が検証されており、一定の結論には到達していない。一方、咀嚼機能と生活自立度の関連は認められており、歯科医や歯科衛生士によるチームアプローチによる口腔ケアの重要性が指摘されている。研究方法の課題として、歯学系の研究者による研究が多くを占めており、介護、看護領域からの臨床実践による研究報告が希少であり今後の進展が望まれる。また 摂食障害への対応に関する研究としては、誘導方法や環境調整のみならず、排泄や睡眠等の一連の生活に関するセルフケア能力を引き出す環境アレンジメントの重要性について指摘されている。

睡眠障害への対応に関する研究は、少数であるが認知症高齢者の睡眠時間は一般高齢者と有意な差は無いとする研究や、光療法によって睡眠効率が向上し食事摂取が円滑になった事例研究が報告されている。しかし、睡眠障害に関する研究は生活全般の変化と環境要因の網羅的な把握を必要とすることから研究データの収集や影響要因の統制において、研究実施上の多くの課題が推測される。

ターミナルケアに関する研究は、告知等に関する意識調査等が実施され、特にグループホームにおける医療的な判断や対処の困難性、医療機関との協力体制の必要性が指摘されているが、認知症介護研究においては萌芽的なテーマであると考えられ、今後の発展が必要である。

認知症介護に関する基本的な介護方法研究全体の課題としては、排泄や入浴等に関する研究がほとんどないことや介入研究が少ないこと等が挙げられる。

## (2) BPSD、生活支援・ケア全体、コミュニケーション、若年認知症に関する認知症介護研究の傾向と課題

BPSDに関する研究は、BPSD 全体、徘徊、精神症状、暴力的行為、介護抵抗、その他に関連する研究に分類される。BPSD 関連の研究は、実態把握や評価尺度の作成を契機に、非薬物療法や声かけの有効性に関する研究が多くみられているが、事例検討による介入研究が主流である。徘徊に関連する研究は、徘徊行動の実態把握、介護職員の対応や居住環境との関連の把握、声かけや会話、環境改修の効果等に関する事例的な研究が主なものであった。精神症状の研究は、せん妄や自殺企図の実態把握や、騒音刺激の影響に関する研究であった。暴力的行為に関する研究は、介護職員への影響やメンタルヘルス、リスクマネジメント研修に関する研究であり、対応方法に関する研究は無かった。

認知症高齢者とのコミュニケーションに重要な要素としては、保護的・受容的な関わり、傾聴の姿勢、認知症高齢者の体験世界を理解する姿勢、個別的な障害や環境に配慮した個別対応等の重要性が挙げられ、特に利用者の人権に配慮した会話スタイルを心がけることが重要である。一方で、職員のコミュニケーションスキルの自己評価は、ソーシャルサポートの有無、疲労感の低さ、仕事満足度の高さ、職務経験期間の長さに関連しており、これらの要因に配慮した組織体制・教育支援体制のあり方を考慮する必要がある事が指摘されている。

若年認知症に関する研究は1993年に若年期における認知症発症率に関する実態調査が1件のみであり、その後近年まで報告がなく、2006年以降に報告される家族介護者支援における課題抽出2件と、若年認知症に対するイメージ調査報告1件のわずか3論文であった。若年認知症に関する課題として、理解の普及、サービス体系の開発、経済的支援策の構築、若年認知症の人と家族が集える場の創出、相談体制の構築、若年認知症の人の子ども世代にかかわる懸念(子育て、疾患に対する子どもの理解や受け入れ、子どもの担う介護負荷、遺伝など)、家族・親戚の認知症に対する理解などが指摘されている。今後は若年認知症者に関する実態調査報告も含めて、包括的な支援体制構築に資する研究・実践報告が待たれるところである。

生活支援・ケア全体に関する研究は、実態調査研究38論文、介入的研究13論文であり、実態把

握的な研究が多い傾向にある。生活支援やケア全体に関する研究は多岐に渡る内容となっており、短期入所事業や入所施設利用者および家族介護者の生活及び介護実態の把握に始まり、施設入所者のケアニーズと福祉サービス提供に関する実態、施設における療法の実態、デイケアの家族介護者への影響、在宅介護の実態報告等がなされている。2000年以降は、認知症高齢者ケアの技術の明確化や認知症の重症度ならびに寝たきり度と介護量との関連性、家族介護者の介護実践力や介護プロセスについての質的研究、認知症高齢者本人の体験世界や非認知症利用者との交流の実態が報告されている。近年では、施設ケアにおける認知症末期の利用者に対するケアプロセスや関わり方、さらに家族と職員の情報共有に関する方略や、介護職員の認知症介護に関する円滑化の規定要因について検討されている。介入的研究に関しては、訪問看護の効果や視覚・聴覚などに働きかける感覚刺激の有効性、施設におけるコンタクトパーソンの有効性に関する研究が散見された。近年では Dementia Care Mapping 法を用いたケアの有効性、中等度・重度認知症高齢者の自己決定機会を提供する看護介入の効果が報告されている。

全体的な傾向としては、認知症介護研究においては中核的な内容であり、比較的早期から研究が実施されているにも関わらず、実態把握的な研究が多く介入研究が少数であることが課題である。BPSD への対応については事例的な研究が多くモデル構築には至っていないのが現状である。コミュニケーション方法については、傾聴や受容、心理を考慮した対応等、特に認知症高齢者特有の効果的な方法とは言い難く、一般的に有効なコミュニケーション方法が確認されたのみである。若年認知症については新出テーマであるが故に実態把握も不十分であり、研究課題が山積しているテーマである。いずれにしろ、このテーマに関する研究数は最も多い傾向にあるが、研究数にともなった方略モデルの構築や標準化が立ち後れている傾向が伺える。事例研究が多く介入研究が少ない傾向をみると、認知症介護研究における実施上の困難さや課題が推測される。

### (3) 認知症高齢者の環境支援に関する研究の傾向と課題

認知症高齢者の環境支援に関する研究について、環境の範囲ごとに認知症高齢者と物理的環境との関係性に関する研究の動向及び課題を整理した。

環境支援に関する研究は環境の範囲によって分類すると、認知症特性を考慮した環境支援、パーソナライズを支援する環境支援、生活場面における環境支援、環境適応に対する支援、地域における環境支援の5つに大別される。認知特性を考慮した環境支援研究では、認知機能障害の状況による環境認識の特性把握や、認知機能や記憶の障害に応じた物理的な環境補助の有効性に関する検証が実施されている。パーソナライズの支援法に関する研究では、施設内あるいは在宅において、安定的な居場所形成に関する方略や有効性に関する検証が実施されている。生活場面における環境支援の研究では、主に観察法によって認知症高齢者の個々の生活場面を把握し、有効な環境支援方法を探索している。特に、生活場面の中でも他者との交流場面对象とされる研究が多く、実態の把握や交流促進に影響する環境支援の方略が検討されており、小規模な生活環境が認知症高齢者の交流を促進し、自発性を高めるといった研究結果も報告されている。環境適応に関する研究では、環境支援による環境適応の促進効果や、不適応状況への環境調整の有効性が検証されている。地域における環境支援の研究では、施設やサービスを含む認知症介護の範囲を地域まで拡大し、地域環境を考慮に入れたサービスや介護が認知症高齢者の生活の質に影響することを指摘している。

認知症高齢者への環境支援に関する研究の傾向と課題としては、全般的に家庭的な環境づくりを実践する方法を探索する研究が多く、環境異変によって生じやすい生活行為や交流への影響を低減し、より自発的な生活遂行を促進、補助する環境支援方法の開発、検証が目標となっている傾向が見られている。課題としては、現在報告される環境支援法に関する研究知見を容易に応用できる方法論の確立や、自宅や地域における環境支援方法の開発、検証、さらに認知機能や身体機能が低下してもライフスタイルを尊重するという視点から、ターミナルケア環境に関する研究

は今後の発展が期待されるテーマであり、認知症高齢者が選択する住居や施設の種類に関わらず、生活を支援する普遍的な空間や環境のあり方に関する研究の進展が重要である。

## 2) 認知症介護に関連する評価法の研究傾向と課題

502件の研究について、研究目的及び対象者ごとに分類し動向の整理を実施したところ、評価法に関する研究は、評価法や尺度の開発と認知症高齢者やケアの効果測定ツールとしての有効性検証を目的とした研究に大別できる。対象としては、認知症高齢者本人について認知機能、BPSD、ADL、介入効果、QOL、介護者については介護負担感、ケア全般については認知症ケア全体に関する評価法開発に分類される。

認知症高齢者を対象とした評価法研究の動向を概括すると、認知機能や中核症状の評価については、簡便で、早期の発見を可能とするスクリーニング法としてHDS(長谷川式簡易知能評価スケール)、HDSR(改定長谷川式簡易知能評価スケール)、時刻テスト、勘定テスト、Kohsテスト、かなひろいテスト、RDST(Rapid Dementia Screening Test)、IADL 遂行能力と日常記憶能力、SC-test(Simple Cognitive Test)、生活意欲の低下状態の把握等に関する検証が実施されている。認知症の重症度については、MENFIS(Mental Function Impairment Scale)やNCSE(Neurobehavioral Cognitive Status Examination)等の開発や、コミュニケーション能力については、認知・言語コミュニケーションスクリーニングテスト、簡易コミュニケーションスケール、LDT-R(言語解読能力テスト改訂版)等、言語面、非言語面の能力や状態評価の開発、BPSDの評価については、DBDスケール(Dementia Behavior Disturbance Scale)、TBS(Troublesome Behavior Scale)、BEHAVE-AD日本語版、BPSD-IPA scoreの有効性等による評価法の開発、検証が実施されている。また、認知症の全体像評価を目的に、BPSD、認知機能、ADLの状態を総合的に評価する方法として、CPS(Cognitive Performance Scale)、ASSD(Assessment Scale for Symptoms of Dementia)の開発や、NOSGER日本語版(Nurses' Observation Scale for Geriatric Patient)の検証が実施されている。高齢者の状態評価によって介護ニーズを評価する方法としては、ABCD(介護状況評価票)、CPAT日本語版(Care Planning Assessment Tool)、CDS日本語版(Care Dependency Scale)の開発検証が実施されている。QOL評価法については、生活健康スケール、アルツハイマー型認知症患者のQOL尺度(在宅患者版)、DQoL日本語版(Dementia Quality of Life Instrument)、QLRSB-D(A Scale for Old People with Dementia)、日本語版DCM(Dementia Care Mapping)のWIB値、EuroQol日本語版(EQ-5D、VAS)の開発、検証が実施されている。希少ではあるが、認知症高齢者の心理や内面性に関する評価法として高齢者用絵画統覚検査(PAAM)、高年者用絵画統覚検査(SAT)、コラージュ療法の有用性について検証されている。

また、認知症高齢者に対する非薬物療法の効果評価に関する研究も多く実施されており、音楽療法や回想法その他の療法の介入効果の検証用に開発されている。おおよそ上記に挙げられた評価法を単体あるいは組み合わせて活用する傾向が見られるが、独自に作成しているものとしては、音楽療法評価法や、BEHAVE-AD、GBSに唾液CgA等のストレス指標を加えたり、回想法観察評価尺度(Reminiscence Observational Rating Scale;RORS)、デイケア評価のための認知症患者の表情による心理評価スケール(PAFED)等の開発検証が実施されている。

それ以外にも介護者に対する介護負担感の評価法としてCCI(Cost of Care Index)、社会・家庭的負担評価票(CBS)、ZBI日本語版(Zarit Caregiver Burden Interview)の活用等、開発、検証が実施されている。また、ケアやサービスの質を評価する方法の開発、環境評価法の開発、介護家族による援助希求行動の評価法等について希少であるが研究が実施されている。

全体的な傾向として、認知機能や認知症高齢者の行動等、認知や行動を対象とする評価法についての研究が多く、独自のもの、海外の研究成果の応用なども含めて信頼性や妥当性の検証も進展しており、研究成果が着実に蓄積されていると伺える。しかし、心理面や感情面、内的な側面に関する研究はQOL評価法を代表とする生活状態や生活感評価に関する研究は増加の傾向が見られるが、

認知症高齢者の心理面を評価する研究は、認知症高齢者の特性や実施上の制約等の理由から研究数も希少である。ケアやサービス、環境面の評価研究については、昨今少量ずつみられてはいるが今後の発展が期待されるテーマといえるだろう。認知症介護に関する評価法に関する研究の課題としては、齊藤<sup>(1)</sup>が指摘するように感情面や気分、ストレス、QOL等の評価については研究者の価値観によって主観的に評価している場合が多いことが課題であり、今後は認知症高齢者の生活状況について客観的に測定可能な側面の評価結果を材料に、認知症高齢者の内的な側面を洞察するような研究方法が必要であると考えられる。

### 3) 認知症介護に関連する人材育成・マネジメント研究の傾向と課題

本研究で分析対象となった研究502件のうち人材育成や教育方法に関する直接的な研究は2件であり、その他の研究は人材育成や教育方法の検証よりも前段階としての意識調査や、評価手法に関する基礎資料としての関連研究であった。人材育成手法の検証に関する研究としては、パフォーマンス・マネジメントによる職場内研修が職員の行動目標の実施率向上や入居者と職員の交流頻度の増加、ストレスの軽減等の効果を有する有用な教育法であることを実証している。他方は、入職3年未満の職員について職場での内部研修経験が、認知症高齢者のBPSDを問題解決的に捉えるよりも、探索的に捉えるような意識に影響していることを実証している。また、研究手法に関しては、約半数の研究が定性的な研究及び質的な分析を実施している傾向が見られている。この領域に関する研究課題としては、研究数が少ないことと、評価手法が確立されていないことが挙げられる。認知症介護研究において、介護の質を向上する上で専門家の養成や教育手法の開発は重要なテーマであるにも関わらず、教育手法の標準化や教育効果の評価に関する研究は、今後重点的に取り組むべきテーマである。

### 4) 認知症介護に関連する家族介護者を対象とする研究傾向と課題

介護家族を対象とする研究の傾向は、介護家族の内的過程に関する研究、BPSDと家族の関係に関する研究、認知症者と家族のコミュニケーションに関する研究、医療と家族に関する研究、介護サービスと家族に関する研究に大別される。内的過程に関する研究の傾向としては、負担感の要因解明や、負担感の測定方法の開発及び負担軽減を目的とした負担要因の探求と負担軽減方法の探求など介護者の負担感を標的とした研究に始まり、徐々に介護者の介護体験過程等の横断的、縦断的研究による介護認知に関する研究へと移行してきている。家族介護者の介護認知について明らかとなっている知見は、介護者へのサポート状況や個人的な特性によって介護体験の捉え方が否定的にも肯定的にも認知され、介護者の介護態度の変容に影響するということである。今後の課題としては、家族形態の変容あるいは多様性に対応する一定の家族支援方法を確立することの難しさが挙げられる。つまり、家族研究の方向性として介護家族の形態や個別の様相に応じた支援方法を開発する必要があり、家族の様態にあわせた様々な介護者支援方法を多様に確立するような研究が望まれる。BPSDとの関連については、BPSDから家族への影響に注目した研究が多いが、今後は家族からBPSDへの影響に関する研究が必要であり、認知症者と家族とのコミュニケーションに関する研究は研究数が少なく研究数の増加が課題と考えられる。医療と家族介護者に関する研究においても医療受診に関する研究や告知に関する研究が実施されるが研究数は少なく、今後のさらなる研究が必要である。それ以外では、介護サービスの家族介護者への効果や有用性に関する研究が実施されている傾向が見られている。

## V. 結論

### 1. 認知症介護研究の課題と方向性

本研究では認知症介護に関する研究の動向を把握し、課題の抽出によって今後の認知症介護研究の重点課題を明らかにすることを目的に、認知症介護に関連する研究論文502件を抽出し、研究内容、研究方法、研究対象者の属性に関する分析と施策課題および実践上の課題を考慮した主要なテーマに関する研究動向のレポートを作成し、認知症介護研究の方向性について考察した。

#### 1) 研究全体の課題と方向性

(1) 認知症介護研究における研究内容の傾向は、生活支援方法、療法、BPSD、家族、心理、環境支援、評価法、ストレス・負担感に関する研究数は多いが、研究量と研究成果の質が比例しているのか、これらのテーマに関する理論や方法の標準化が確立されているか、詳細な内容分析が必要である。

一方、権利擁護、虐待、若年認知症等については比較的新しいテーマであり、研究数が少ない傾向がみられており今後の更なる発展が望まれる。マネジメントや人材育成、ターミナルケアについても希少であり、これらの研究への一層の取り組みが重要であると考えられる。

(2) 認知症介護に関する研究数の年次推移の傾向から推測すると、研究の実施数は介護実践上のニーズだけでなく、むしろ高齢者福祉や高齢者関連施策の方向性によって強く影響を受けており、多くの研究が公的な研究助成を基に実施されることを鑑みれば、認知症介護に関連する施策課題と研究数の関連は相関が高い傾向がみられた。これらのことは、研究者によるニーズや認知症介護実践上の課題によって研究内容が決定されるよりも、国の認知症対策の方向性によって研究内容が決定される傾向が強いとも考えられる。今後は、認知症介護実践上のニーズや研究者の問題意識によって研究の方向性を誘導し、施策を牽引する必要があるだろう。

(3) 認知症介護研究における研究タイプの傾向として、実態把握的な研究タイプよりも探索的な研究タイプの方が徐々に増加しつつあり、研究の成熟度としては、実態の把握よりも探索的なモデル生成やモデル検証の段階に発展していることが推測される。しかし、厳密な仮説設定による仮説検証型の研究が少ない傾向がみられ、一般理論や法則の確立は時期を待たなければならない状況である。研究内容別の傾向をみても療法・アクティビティ、評価法、ストレス・負担感、家族に関する研究は比較的早くから着手されている内容にも関わらず、探索的な研究が多いことは厳密な仮説構築が困難である理由を検証する必要があるだろう。又、地域ケア、虐待防止、若年認知症対策、権利擁護、人材育成・教育、リスクマネジメント、ターミナルケア等の比較的新しい内容については、できるだけ早い段階でモデルを構築し検証するような研究の促進が必要であろう。

(4) 全体的に定量的な研究数の割合が多い傾向にあるが、近年、定性的な研究の実施割合が増加しつつあり、定性的な研究手法も多く実施されている傾向がみられている。考察でも述べたように、認知症介護研究のような応用化学的な実践研究分野においては、定量的な研究と定性的な研究の双方が相互補完的に機能し研究成果の質を高める事が重要であり、本研究の結果も好ましい傾向にあると考えられるが、定性的な研究による成果が認知症介護におけるモデル生成や、因果構造の把握に貢献しているのかについて詳細な分析が必要である。

(5) 研究方法については、研究内容別、研究の歴史、研究標的の性質によって質問紙法や観察法、面接法、その他の方法が臨機応変に実施されている傾向が見られているが、認知症高齢者を直接対象とする研究においては観察法や面接法が多用されている。介護者や家族、認知症ではない健常高齢者を対象とする場合は、質問紙法による調査が多く実施されており、対象者の特性によって方法が限定される傾向が特徴的である。認知症高齢者を対象とする研究においては、高齢者本人の意思確認が困難であり、自ずと行動やコミュニケーション、発話の観

察や、面接による評価に限定されることが推測される。観察法や面接法の課題として、多標本を対象とすることや、研究実施場所、対象者の所在場所が限定され、研究成果の一般性や普遍性に関する手続きが課題となる場合が多い。今後は、観察法や面接法による研究対象者の確保や、研究場所や対象者の所在が偏らないような工夫が必要であろう。

- (6) 分析方法については、記述統計の実施割合は多いが多変量解析や検定の実施率が低い傾向が見られている。逆に、カテゴライズによる分析等の質的なデータ分析が多く実施される傾向がみられており、質的な研究方法や分析に関する厳密な基準の徹底や、モニターが必要となるであろう。
- (7) 研究範囲の傾向として、全国を対象とする研究数が少なく地域による影響要因を考慮していない、あるいは研究成果の一般性を目的とした研究の実施割合が少ないことが危惧される。研究経費上の問題か、研究実施上の制約によるものか等、原因分析が必要であろう。
- (8) 研究対照群の設定は1群設定が多く、2群以上を予め統制した研究数が3割弱と少ない傾向が見られており、仮説検証を目的とした比較研究が少ないことを表している。今後は厳密な仮説設定と、仮説に準拠した比較群の想定による検証的な研究の実施が望まれる。
- (9) 認知症介護研究における研究対象者の傾向として、認知症の原因疾患が不明な研究が多く、疾患別ケア研究の必要性からも疾患を特定した研究の実施が望まれる。
- (10) 研究対象者の所在傾向について、高齢者の所在は施設入所や入院者が多くを占めている傾向が見られており、特に認知症高齢者の6割が入所、入院者であった。今後は、自宅在住の認知症高齢者を対象とした研究が必要である。しかし、研究対象者の確保や、自宅在住の認知症高齢者数の少なさ、研究実施に関する統制や観察や面接等の方法上の制約から自宅に居住する認知症高齢者を対象とする研究の実施は様々な課題が予測される。これらの課題を解消しうる研究方法の工夫が一層求められるだろう。
- (11) 認知症介護に関連する研究において、専門家を対象とする研究のうち介護職や看護職を対象とする研究の割合が多い傾向がみられ、医師、相談員、ケアマネージャー、ホームヘルパー等を対象とする研究は少ない傾向がみられた。おそらく認知症高齢者に限定しない高齢者全体を対象とする研究においては異なる傾向が予測されるが、今後、地域連携や在宅の認知症介護に関する研究が必要となることを鑑みれば、看護、介護職以外の専門家を対象とする研究も重要となることが予測される。

## 2) 研究テーマ別の課題と方向性

- (1) 認知症介護に関する基本的な介護手法に関する研究の課題としては、摂食や口腔機能に関する研究は多いが、排泄や入浴等に関する研究がほとんどないことや、実態把握的な研究が多く介入研究が少ないこと等が挙げられ、BPSDに限定しない排泄や入浴等への支援に関する研究が重要である。さらに生活の根幹を成す行為であるが故に、方法の標準化が一層必要と考えられる。
- (2) 認知症高齢者のターミナルケアに関する研究については、比較的新しい研究テーマであり、研究数も少なく萌芽的な段階にあるといえる。一層の発展が必要であると考えられる。
- (3) BPSDへの対応については事例的な研究が多くモデル構築には至っていない傾向が伺える。コミュニケーション方法については、傾聴や受容、心理を考慮した対応等、特に認知症高齢者特有の効果的な方法というよりは一般的に有効なコミュニケーション方法が確認されている事に終始している。若年認知症については新出テーマであるが故に実態把握も不十分であり、研究課題が山積しており、今後の発展が期待される。いずれにしろ、このテーマに関する研究数は多い傾向にあるが、研究数にともなった方略モデルの構築や標準化が立ち後れている傾向が伺え、事例研究が多く介入研究が少ない傾向をみると、認知症介護研究における実施上の困難さや課題が推測される。

- (4) 認知症高齢者への環境支援に関する研究課題は、全般的に家庭的な環境づくりを実践する方法を探求する研究が多く、環境異変によって生じやすい生活行為や交流への影響を低減し、より自発的な生活遂行を促進、補助する環境支援方法の開発、検証が実施されているが、それらの知見を容易に応用できる方法論を確立することや、自宅や地域における環境支援方法の開発、さらに認知機能や身体機能が低下してもライフスタイルを継続できるようなターミナルケア環境に関する研究等、認知症高齢者が選択する住居や施設の種類に関わらない普遍的な空間や環境のあり方に関する研究の進展が課題と考えられる。
- (5) 認知症介護に関連する評価法の研究は、認知や行動を対象とする評価法についての研究成果は早くから着実に蓄積されてきている。しかし、認知症高齢者の心理面や感情面を評価する研究は、認知症高齢者の特性や実施上の制約等の理由から研究数も希少である。またケアやサービス、環境面の評価研究についても今後の発展が期待されるテーマである。今後は、感情面や気分、ストレス、QOL等の評価法研究の方略について、生活状況等の客観的に測定可能な側面の評価結果を材料に、認知症高齢者の内的な側面を洞察するような研究方略が必要であると考えられる。
- (6) 認知症介護に関する人材育成・教育やマネジメントに関する研究の課題は、他のテーマに比較して研究数が少数であること、評価手法が確立されていないことが挙げられる。認知症介護の質を向上する上で専門家の養成や教育手法の開発は、一層重要なテーマであり、認知症介護に関する教育手法の標準化や教育効果の評価に関する研究は今後重点的に取り組むべきテーマであるといえる。
- (7) 認知症介護における家族研究の課題としては、家族形態の変容あるいは多様性に対応する一定の家族支援方法を確立することの難しさが挙げられる。家族研究の方向性としては、めまぐるしく変化する家族の様態にあわせた様々な介護者支援方法を多様に確立するような研究が望まれるだろう。また家族からBPSDへの影響に関する研究や、認知症者と家族とのコミュニケーションに関する研究、医療受診に関する研究や告知に関する研究は研究数が少なくさらなる研究の進展が望まれる。

## 引用・参考文献

### I

- 1) 新名理恵：在宅痴呆性老人の介護者負担感－研究の問題点と今後の展望－，老年精神医学雑誌，2(6)，754-762，004.
- 2) 中島紀恵子：痴呆ケアと実践研究上の課題，日本痴呆ケア学会誌，2(1)，9-16，2003.
- 3) 斎藤正彦：認知症における非薬物療法研究の課題と展望，老年精神医学雑誌，17(7)，711-717，2006.
- 4) 長田久雄：日本痴呆ケア学会の研究動向と課題，日本痴呆ケア学会誌，2(2)，189-192，2003.

### III-1-2)-(1)

- 1) 沖本公繪，家入浩二，松尾浩一，寺田善博：老化と咀嚼－老人病院における口腔の実態と痴呆度との関連性について，補綴誌，35，931-943，1991.
- 2) 大竹登志子，川島寛司，柴崎公子，渡辺郁馬，杉原直樹，山根瞳，戸島國：特別養護老人ホーム利用者の口腔ケア－痴呆群と非痴呆群の比較検討－，老年歯学，7(2)，178-184，1993.
- 3) 重富俊雄，浅野辰則，加藤武司，宇佐美雄司，上田実，河野和彦：口腔機能と老化に関する研究－痴呆の危険要因に関する疫学的検討－，口科誌，47(3)，403-407，1998.
- 4) 介池邊一典，難波秀和，谷岡望，小野高裕，野首孝祠：介護の必要な高齢者の口腔内状態と義歯使用状況－生活環境および痴呆の有無による影響－，老年歯学，12(2)，100-106，1997.
- 5) 飯沼光生，安井清子，峯田淑江，山田幸子，田村康夫，久保金弥，桑野稔子：老人保健施設入所者における痴呆と口腔状態，生活自立度との関係，岐歯学誌，30，150-155，2004.
- 6) 水口俊介，高岡清治，宮下健吾，下山和弘，植松宏，巫春和，内藤征男，関口益弘：要介護高齢者における食事形態，口腔清掃，義歯使用の状況－日常生活自立度および痴呆度との関連－，老年歯学，16(1)，48-54，2001.
- 7) 小向井英記，桐田忠昭，露木基勝，杉村正仁：超高齢化地域における身体障害老人と痴呆性老人の生活状況及び口腔内状況の課題とその対策についての検討－第1報 生活状況と口腔機能障害・口腔疾患・義歯の状況について－，老年歯学，16(1)，55-64，2001.
- 8) 貞森紳丞，佐藤幸夫，中居伸行，西村正宏，濱田泰三：重度痴呆高齢者における義歯装着状況と痴呆症状および日常生活活動能力との関連－単科精神病院の痴呆専門病棟の1年後の観察から－，老年歯学，17(3)，332-336，2003.
- 9) 貞森紳丞，古胡真佐美，濱田泰三，笹原妃佐子：グループホームに入居している認知症高齢者の義歯装着，日常生活動作能力，精神状態，口腔内環境との相互関連，障害者歯科，27(2)，128-133，2006.
- 10) 名原行徳，三宅雄次郎，河原道夫：某特別養護老人ホーム入所者の口腔内状態について，広歯誌，28，215-220，1996.
- 11) 池田和博，平井敏博，川上智史，越野寿，石島勉，吉丸裕子：要介護高齢者における咀嚼機能と痴呆ならびに自立度との関連について－咀嚼能力とMDS/RAPsとの関連－，老年歯学，14(3)，287-296，2000.
- 12) 小向井英記，桐田忠昭，露木基勝，杉村正仁：超高齢化地域における身体障害老人と痴呆性老人の生活状況及び口腔内状況の課題とその対策についての検討－第2報 生活状況と歯，歯肉の状況・口腔内の状況，その関連性について－，老年歯学，16(2)，228-235，2001.
- 13) 新井康司，角保徳，植松宏，三浦宏子，谷向知：痴呆性高齢者の歯科保健行動と摂食行動－国立療養所中部病院歯科における実態調査－，老年歯学，17(1)，9-14，2002.
- 14) 渡辺由利子：要介護高齢者における口腔ケアの自立維持－認知症の影響－，口病誌，73(1)，53-61，2006.

- 15) 石倉健二, 中村容子: 認知症高齢者の口腔状態と認知症自立度の関連についての検討, 介護福祉学, 15(1), 16-21, 2008.
- 16) 中村広一: 痴呆患者における義歯装着行為の障害に関する臨床的検討, 老年歯科医学, 16(3), 350-355, 2002.
- 17) 貞森紳丞, 佐藤幸夫, 中居伸行, 濱田泰三, 村田比呂司: 看護師の口腔ケアへの関心 - 痴呆専門病棟を備えた単科精神病院の場合 -, 老年歯学, 17(3), 326-331, 2003.
- 18) 眞木吉信, 榎智嗣, 杉原直樹, 高江洲義矩: 痴呆老年者の食品摂取受容に関する研究, 老年歯学, 5(1), 39-43, 1991.
- 19) 松本昭英, 今藤満里子, 本荘恭子, 若林節子: 老人患者の栄養動態 - 老人性痴呆症との関連性 -, Jpn. J. Prim. Care, 14(4), 405-416, 1991.
- 20) 綿貫成明, 菅田勝也, 木村恵子, 南澤汎美, 森淑江, 竹尾恵子, 塚本美和子: 老年期痴呆患者の入院後の体重減少とBMI(Body Mass Index)の低下, 日本看護科学会誌, 18(2), 51-62, 1998.
- 21) 竹腰恵治, 小谷順一郎, 上田裕, 松川房充, 伊崎克弥, 権田悦通: 重度痴呆性老人における食事形態および口腔内状況について, 老年歯学, 11(3), 186-191, 1997.
- 22) 山田律子: 痴呆性老人の摂食困難とケアのあり方に関する研究, 老年看護学, 2(1), 69-78, 1997.
- 23) 山田律子, 磯田順子, 中島紀恵子, 北川公子, 井出訓, 佐藤美恵子, 依本正恵: 痴呆の程度別「摂食リズムの乱れ」の特徴 - 作成したシートを用いて -, 老年看護学, 4(1), 73-82, 1999.
- 24) 末弘理恵, 三重野英子, マーナ豊澤英子, 桶田俊光: 痴呆性高齢者の摂食困難の状況とその影響要因 - ビデオ観察による分析 -, 老年看護学, 7(1), 79-87, 2002.
- 25) 渡部月子, 小林隆司, 片平伸子, 別所遊子: 認知症高齢者の食事行動援助における手がかりに関する研究 - 介護老人保健施設における調査から -, 日本地域看護学会誌, 8(2), 58-64, 2006.
- 26) 川崎聡美, 平上尚吾, 石井理恵, 佐藤ゆかり, 香川幸次郎: 認知症高齢者の食事を構成する動作と階層性についての検討, 日本認知症ケア学会誌, 6(1), 20-28, 2007.
- 27) 福岡敦子, 中村勝則, 佐藤了: 高齢者の加齢と摂食自立性の維持残存 - 介護老人保健施設入所者を対象に -, 日本認知症ケア学会誌, 8(3), 414-418, 2009.
- 28) 東嶋美佐子, 宮川由香: 老人性認知症疾患治療病棟における摂食・嚥下の実態調査, 日本認知症ケア学会誌, 8(3), 428-432, 2009.
- 29) 中山孝子: 痴呆性高齢者の食事行動に関するアセスメントと効果的介入, 老年看護学, 7(1), 61-69, 2002.
- 30) 山田律子: 痴呆高齢者の摂食困難の改善に向けた環境アレンジメントによる効果, 老年看護学, 7(2), 57-69, 2003.
- 31) 村瀬千春, 柴田弘子, 川本利恵子, 和田敏正: 療養型病床群病棟に入院中の高齢者のタイムスタディによる睡眠の実態調査, 高齢者のケアと行動科学, 9(1), 84-92, 2003.
- 32) 村瀬千春, 柴田弘子, 川本利恵子, 和田敏正: 痴呆症状のある高齢者の睡眠障害と移動動作の能力レベル差による援助の実態の検討 - タイムスタディによる実態調査から -, 高齢者のケアと行動科学, 9(1), 93-103, 2003.
- 33) 関待子, 金子麻美, 高久昇, 寺西敬子: 認知症を持つ高齢者に対する光療法及びスタッフの関わりによる睡眠障害へのアプローチの実態 - 一日一日を充実できるように -, 高齢者のケアと行動科学, 13(1), 8-14, 2007.
- 34) 山下真理子, 小林敏子, 松本一生, 藤野久美子: アルツハイマー病の病名告知と終末期医療に関する介護家族の意識調査, 老年精神医学雑誌, 15, 434-445, 2004.
- 35) 平川仁尚, 益田雄一郎, 葛谷雅文, 井口昭久, 旭多貴子, 植村和正: 高齢重度認知症患者および高齢進行癌患者の在宅終末期ケアに関する研究 - 在宅終末期ケアを推進する診療所群における前向き研究から -, 日老医誌, 43, 355-360, 2006.

- 36) 山下真理子, 小林敏子, 松本一生, 小長谷陽子, 中村淳子: 介護家族の視点からみた認知症高齢者の終末期治療－その現状と課題－, 日本認知症ケア学会誌, 6(1), 69-77, 2007.
- 37) 平木尚美, 大町弥生: 認知症高齢者グループホームの終末期ケアに対する介護職員の思い, 日本看護福祉学会誌, 13(2), 119-131, 2008.
- 38) 千葉真弓, 楠本祐子, 奥野茂代, 渡辺みどり: グループホームにおける認知症高齢者への終末期ケアに期待される看護師の役割, 日本看護福祉学会誌, 14(2), 53-67, 2009.
- 39) 平松万由子, 大淵律子: 認知症グループホームの高齢者終末期ケアに影響を及ぼす要因－管理職の認識に焦点を当てた質的分析－, 日本認知症ケア学会誌, 9(3), 497-506, 2010.
- 40) 小長谷陽子: 認知症の人の看取りにおける医療と介護の連携に関する研究－医療法人と社会福祉法人運営のグループホームへのアンケート調査より－, 日老医誌, 47, 452-460, 2010.
- 41) 真田順子, 高橋正彦, 北村ゆり, LenaAnnerstedt, GertElofsson, LarsGustafson, 井上新平: 痴呆性老人の長期ケアシステム－スウェーデンマルメ市の各種施設の老人の実態調査結果から－, 老年精神医学雑誌, 4(7), 781-788, 1993.
- 42) 朝田隆, 吉岡充, 森川三郎, 小山秀夫, 北島英治, 川崎光洋, 木之下徹, 浅香昭雄: 痴呆患者に対する看護者よりみた基本的介護状況評価票(ABCD)の作成, 日本公衆衛生雑誌, 41(2), 105-113, 1994.
- 43) 杉山智子, 松井典子, 杉下知子: アルツハイマー型中期痴呆症患者に対する望ましいケアの検討－排泄・身支度ケアへの抵抗に注目して－, 老年看護学, 8(1), 31-38, 2003.
- 44) 佐藤ゆかり, 齋藤圭介, 原田和宏, 香川幸次郎: 認知症の有無別にみた要支援・要介護1の在宅高齢者におけるADLと移動動作との縦断的な関係, 老年社会科学, 28(3), 321-333, 2006.
- 45) 鳶野沙織, 新鞍真理子, 下田裕子, 東海奈津子, 寺西敬子, 山田雅奈恵, 田村一美, 山口悦子, 永森睦美, 上坂かず子, 成瀬優知: 要介護認定を受けた認知症高齢者の日常生活自立度の変化と認知症に関連する症状項目の変化, 厚生指標, 57(6), 25-32, 2010.
- 46) 吉田清子: 認知症高齢者への訪問介護員のかかわり行動についての一資料－着脱場面での対応を中心に－, 介護福祉学, 14(2), 175-180, 2007.
- 47) 白井みどり, 佐々木八千代, 北村有香, 長畑多代, 荻野朋子, 山内加絵, 今川真治, 白井キミカ: 普通型車いすからいすへの変更による認知症高齢者の座位姿勢とその修正に関連する行動の変化, 日本認知症ケア学会誌, 9(3), 564-572, 2010.

### Ⅲ-1-2)-(2)

- 1) 大井弦, 鈴木重任, 山本俊一, 深山智代, 甲斐一郎, 武長修行, 山崎信行, 市川伸一, 原実, 中川政宣, 佐藤弘明, 名嘉幸一: ボケ老人の異常精神症状発現率: 地域環境指標たり得るか, 日本公衆衛生雑誌, 31(10), 569-571, 1984.
- 2) 藤田綾子, 生田正幸: 特別養護老人ホームにおける痴呆性老人の問題行動と処遇困難, 社会老年学, (24), 3-11, 1986.
- 3) 野口典子: 痴呆性老人の家族介護をめぐる諸問題: 東京都における調査の結果から, 厚生指標, 35(4), 9-14, 1988.
- 4) 岡本多喜子: 精神症状に問題のある老人の介護者にみる社会福祉サービスの利用要因(痴呆性老人の家族介護に関する研究), 社会老年学, (29), 44-50, 1989.
- 5) 冷水豊: 痴呆性老人の家族介護に伴う客観的困難の類型(痴呆性老人の家族介護に関する研究), 社会老年学, (29), 16-26, 1989.
- 6) 佐藤豊道: 痴呆性老人の特徴と家族介護に関する基礎的分析: 特集への序論(痴呆性老人の家族介護に関する研究), 社会老年学, (29), 3-15, 1989.
- 7) 荒木兵一郎, 足立啓: 在宅痴呆性老人の行動類型別居住環境構成, 老年社会科学, 12, 214-227, 1990.
- 8) 朝田隆: 在宅の老化性痴呆患者にみられる問題行動の定量的分析, 老年精神医学雑誌, 2(10), 1225-

1235, 1991.

- 9) 北川公子, 中島紀恵子, 工藤禎子: 痴呆性老人のショートステイ利用に関する状態評価の研究, 社会老年学, (34), 67-76, 94, 1991.
- 10) 本間昭, 新名理恵, 石井徹郎, 長谷川和夫: 老年期痴呆を対象とした精神機能障害評価票の作成, 老年精神医学雑誌, 2(10), 1217-1222, 1991.
- 11) 溝口環, 飯島節, 江藤文夫, 石塚彰映, 折茂肇: DBD スケール(Dementia Behavior Disturbance Scale)による老年期痴呆患者の行動異常評価に関する研究, 日本老年医学会雑誌, 30(10), 835-840, 1993.
- 12) 真田順子, 高橋正彦, 北村ゆり, LenaAnnerstedt, GertElofsson, LarsGustafson, 井上新平: 痴呆性老人の長期ケアシステム: スウェーデンマルメ市の各種施設の老人の実態調査結果から, 老年精神医学雑誌, 4(7), 781-788, 1993.
- 13) 朝田隆, 吉岡充, 森川三郎, 小山秀夫, 北島英治, 川崎光洋, 木之下徹, 浅香昭雄: 痴呆患者の問題行動評価票(TBS)の作成, 日本公衆衛生雑誌, 41(6), 518-527, 1994.
- 14) 石川みち子, 梶田俊邦, 井上勝也: 痴呆性老人の徘徊行動と骨密度に関する一考察: 1万メートルのパラドックス, 高齢者のケアと行動科学, 2, 104-117, 1995.
- 15) 真田順子, 高橋正彦, 北村ゆり, 井上新平: 痴呆性老人の長期ケアシステム分析: 高知市の各種施設の実態調査結果から, 老年精神医学雑誌, 7(3), 295-303, 1996.
- 16) 武村真治, 橋本廸生, 古谷野亘, 長田久雄: 介護サービスが高齢者に及ぼす効果に関する介入研究: 特別養護老人ホームにおける「声かけ」の効果の検証, 老年社会科学, 21(1), 15-25, 1999.
- 17) 山内慶太, 池上直己: 介護保険下での痴呆の評価方法に関する研究: Cognitive Performance Scale (CPS)の信頼性と妥当性, 老年精神医学雑誌, 10(8), 943-952, 1999.
- 18) 浅川典子, 高崎絹子, 旭俊臣, 吉山容正: 在宅痴呆性老人の主介護者の介護負担感の関連要因: 日常問題となる行動との関連を中心として, 日本在宅ケア学会誌, 2(1), 32-40, 1999.
- 19) 天田城介: 施設入所痴呆性老人の移動特性と相互作用の頻度・空間に関する研究, 高齢者のケアと行動科学, 6, 46-57, 1999.
- 20) 石井敏明, 船水さかえ, 竹内楨子: アルツハイマー型痴呆患者の知的レベルとその攻撃性との関係, 老年精神医学雑誌, 12(12), 1421-1429, 2001.
- 21) 大川美佐子, 中村貴志, 小川敬之: 徘徊行動の重症度からみた痴呆性高齢者の臨床的特徴, 高齢者のケアと行動科学, 8(1), 42-49, 2001.
- 22) 長谷川真澄: せん妄状態にある老人保健施設入所者に対する看護師の認識とケアの現状, 老年看護学, 7(1), 128-137, 2002.
- 23) 元永拓郎, 朝田隆: 痴呆患者の7年間の生命予後に影響する要因分析, 日本公衆衛生雑誌, 49(7), 620-630, 2002.
- 24) 小野寿之, 玉井顯, 岩田恒星: 痴呆症状評価尺度 Assessment Scale for Symptoms of Dementia(ASSD)の信頼性・妥当性に関する検討, 老年精神医学雑誌, 13(2), 191-204, 2002.
- 25) 井上勝也: 痴呆性高齢者の徘徊行動に関する心理学的研究, 高齢者のケアと行動科学, 8(2), 4-14, 2002.
- 26) 坂井康純, 福田耕嗣, 寺嶋康, 星野良一, 森川将行, 宮内利郎, 岸本年史, 石田孜郎: 痴呆性疾患における行動心理学的症候 (behavioral and psychological symptoms of dementia ; BPSD)の臨床評価に対する検討: 臨床簡易評価スケール作成の試み, 老年精神医学雑誌, 13(11), 1299-1305, 2002.
- 27) 伊藤敬雄, 伊藤理津子, 木村真人, 佐藤忠宏, 高橋祥友, 山寺博史, 遠藤俊吉: 老年期痴呆の自殺に関する臨床的研究: 脳血管性痴呆とアルツハイマー型痴呆を比較して, 老年精神医学雑誌, 13(11), 1307-1322, 2002.
- 28) 中村広一(国立精神・神経セ武蔵病院): 痴呆患者における義歯装着行為の障害に関する臨床的検討,

- 老年歯科医学, 16, (3), 350-355(2002).16, 3, 350-355, 2002.
- 29) 杉山智子, 松井典子, 杉下知子: アルツハイマー型中期痴呆症患者に対する望ましいケアの検討: 排泄・身支度ケアへの抵抗に注目して, 老年看護学, 8(1), 31-38, 2003.
  - 30) 村瀬千春, 柴田弘子, 川本利恵子, 和田敏正: 研究報告: 痴呆症状のある高齢者の睡眠障害と移動動作の能力レベル差による援助の実態の検討: タイムスタディによる実態調査から, 高齢者のケアと行動科学, 9(1), 93-103, 2003.
  - 31) 村瀬千春, 柴田弘子, 川本利恵子, 和田敏正: 研究報告: 療養型病床群病棟に入院中の高齢者のタイムスタディによる睡眠の実態調査, 高齢者のケアと行動科学, 9(1), 84-92, 2003.
  - 32) 大西丈二, 梅垣宏行, 鈴木裕介, 中村了, 遠藤英俊, 井口昭久: 痴呆の行動・心理症状(BPSD)および介護環境の介護負担に与える影響, 老年精神医学雑誌, 14(4), 465-473, 2003.
  - 33) 山田律子: 痴呆高齢者の摂食困難の改善に向けた環境アレンジメントによる効果, 老年看護学, 7(2), 57-69, 2003.
  - 34) 村瀬千春, 柴田弘子, 川本利恵子, 和田敏正: 痴呆症状のある高齢者の睡眠障害と移動動作の能力レベル差による援助の実態の検討: タイムスタディによる実態調査から, 高齢者のケアと行動科学, 9(1), 93-103, 2003.
  - 35) 六角僚子: 痴呆性高齢者の徘徊行動に対するケアスタッフの対応に関する研究: マイクロカウンセリング技法での対応分析, 日本痴呆ケア学会誌, 2(1), 46-55, 2003.
  - 36) 大西丈二, 梅垣宏行, 遠藤英俊, 井口昭久: グループホームにおける痴呆の行動心理学的症候(BPSD)の頻度と対応の困難さ, 老年精神医学雑誌, 15(1), 59-67, 2004.
  - 37) 筒井孝子: 介護保険制度下の介護サービス評価に関する変化: 痴呆性高齢者に提供された介護サービスと経年的変化, 厚生指標, 51(1), 1-6, 2004.
  - 38) 沖田裕子, 久世淳子, 奥村由美子, 水野裕, 井川美由紀, 大栗功, 橋本直季: 老人性痴呆疾患センター利用状況からみた痴呆性高齢者および家族に必要な支援のあり方, 日本痴呆ケア学会誌, 3(2), 193-202, 2004.
  - 39) 正源寺美穂, 太田あや, 加藤香里, 中出清香, 村田実穂, 山本絵里子, 泉キヨ子, 平松知子: ケアスタッフが遭遇した夜間における認知症高齢者の行動・精神症候群, 老年看護学, 10(1), 148-154, 2005.
  - 40) 水島ゆかり, 前田修子, 斎藤好子: 在宅痴呆性高齢者の行動障害に対する介護者の認識: 日本とイギリスにおける一地方の比較から, 日本地域看護学会誌, 7, 2, 49-54, 2005.
  - 41) 山田思鶴, 鳥羽研二: 痴呆に対するデイ・ケアの効果及び任意選択性作業療法の比較検討, 日本老年医学会雑誌, 42(1), 83-89, 2005.
  - 42) 能見昭彦(脳血管研究所介護老人保健施設アルボース), 美原淑子, 美原恵里, 細谷美内, 美原盤: 音楽療法により behavioral and psychological symptoms of dementia(BPSD)が軽減した認知症高齢者の2例, 日本音楽療法学会誌, 5(2), 207-213, 2005. 5(2)207-213, 2005.
  - 43) 武地一, 山田裕子, 杉原百合子, 北徹: もの忘れ外来通院中のアルツハイマー型痴呆患者における行動・心理学的症候と認知機能障害, 介護負担感の関連について, 日本老年医学会雑誌, 43(2), 207-216, 2006.
  - 44) 山下真理子, 小林敏子, 藤本直規, 松本一生, 古河慶子: 一般病院における認知症高齢者のBPSDとその対応: 一般病院における現状と課題, 老年精神医学雑誌, 17(1), 75-86, 2006.
  - 45) 東野定律: 要介護高齢者の行動障害に関連する要因に関する研究, 日本痴呆ケア学会誌, 5(3), 449-456, 2006.
  - 46) 北村世都, 時田学, 菊池真弓, 長嶋紀一: 要介護者にみられる軽度のBPSDと家族介護者の主観的QOLの関連: BPSDの特徴は家族介護者のQOLを予測できるか, 老年社会科学, 27(4), 416-426, 2006.
  - 47) 北村世都, 時田学, 菊池真弓, 長嶋紀一: 要介護者にみられる軽度のBPSDと家族介護者の主観的

QOL の関連：BPSD の特徴は家族介護者の QOL を予測できるか，老年社会科学，27(4)，416-426，2006.

- 48) 粟生田友子，長谷川真澄，太田喜久子，南川雅子，橋爪淳子，山田恵子：一般病院に入院する高齢患者のせん妄発症と環境およびケア因子との関連，老年看護学，12(1)，21-31，2007.
- 49) 杉浦圭子，伊藤美樹子，三上洋：家族介護者における在宅認知症高齢者の問題行動由来の介護負担の特性，日本老年医学会雑誌，44，717-725，2007.
- 50) 出貝裕子，勝野とわ子：介護老人保健施設における認知症高齢者の agitation と騒音レベルの関連，老年看護学，12(1)，5-12，2007.
- 51) 楠永敏恵，徳田哲男，前川佳史，寫末憲子，蓑輪裕子，細田俊二，瀬戸眞弓：高齢者グループホームとユニットケア施設における放尿の実態と対応，日本認知症ケア学会誌，6(3)，503-511，2007.
- 52) 櫛木てる子，内藤佳津雄，長嶋紀一：在宅における認知症の行動障害が介護への自己評価と介護負担感に及ぼす影響，日本認知症ケア学会誌，6(1)，9-19，2007.
- 53) 加藤悠介，今井朗，石川進，森一彦，足立啓：特養護老人ホームの環境改修が認知症高齢者の行動に及ぼす影響，日本認知症ケア学会誌，6(3)，486-494，2007.
- 54) 佐藤美和子，長田久雄：認知症の行動・心理症状(BPSD)リストの作成の試み：介護福祉従事者のBPSD の理解と対応の実態を通して，高齢者のケアと行動科学，13(1)，41-52，2007.
- 55) 越谷美貴恵：認知症高齢者グループホーム職員に対する暴力的行為に関する研究，日本認知症ケア学会誌，6(1)，47-58，2007.
- 56) 安部幸志，荒井由美子：一般生活者を対象とした認知症の症状に対する援助希求行動尺度の作成とその信頼性および妥当性の検討，老年精神医学雑誌，19(4)，451-160，2008.
- 57) 宮 裕昭：行動分析的対応によって暴力的な介護抵抗と異食を改善した一例，高齢者のケアと行動科学，13(2)，1-10，2008.
- 58) 竹田伸也，井上雅彦：動作療法が有効であった認知症高齢者の1症例，老年精神医学雑誌，19(2)，234-239，2008.
- 59) 松山郁夫：徘徊の有無による認知症高齢者の状態に対する介護職員の認識，介護福祉学，15(1)，41-49，2008.
- 60) 長倉寿子，森本恵美，時政昭次，関 啓子：小集団活動が中等度認知症を有する高齢者のBPSD に及ぼす影響，老年精神医学雑誌，20(12)，1401-1408，2009.
- 61) 三浦和夫，加藤伸司：認知症の行動・心理症状に対する介護職員のとらえ方と研修との関係について：在職年数別にみる内部研修の有効性，日本認知症ケア学会誌，8(1)，51-59，2009.
- 62) 堤 雅恵，柴田寿子，松尾照美，山下 繭，古屋敷明美，小林敏生：認知症高齢者の徘徊に伴うケア上の課題に関する研究：疲労徴候およびエネルギー消費量に焦点を当てた事例検討，日本認知症ケア学会誌，8(3)，419-427，2009.
- 63) 高 紋子，山本則子，岡本有子，高崎絹子：認知症高齢者の攻撃行動に対するケア提供者の認識と対処，高齢者虐待防止研究，6(1)，71-82，2010.
- 64) 北村 立，北村真希，田中那々，倉田孝一：認知症治療病棟入院患者における性差の検討，老年精神医学雑誌，21(12)，1369-1376，2010.
- 65) 綿森淑子，竹内愛子，福迫陽子，宮森孝史，鈴木勉，遠藤教子，伊藤元信，笹沼澄子：痴呆患者のコミュニケーション能力，リハビリテーション医学，26(1)，23-33，1989.
- 66) 太田喜久子：痴呆性老人と主たる介護者との家庭における相互作用の特徴：痴呆性老人の「確かさ」へのこだわりが焦点をあてて，日本看護科学学会誌，14(4)，118，1994.
- 67) 栗須妙，堀尾栄，原田重樹，落合将則，西元幸雄，川村耕造：特別養護老人ホームにおける痴呆性老人の処遇の工夫について，老年社会科学，15(2)，125-135，1994.
- 68) 天田城介：施設入所痴呆性老人のロビーにおける相互作用特性に関する研究：痴呆性老人間の成立・

- 不成立のソシオグラムを中心として, 老年社会科学, 19(1), 39-47, 1997.
- 69) 天津栄子, 中田まゆみ: 老人保健施設における痴呆性老人とケアスタッフの相互作用にみられる特徴, 老年看護学, 3(1), 52-63, 1998.
  - 70) 天田城介: 「痴呆性老人」における, あるいは「痴呆性老人」をめぐる相互作用の諸相, 社会福祉学, 40(1), 209-233, 1999.
  - 71) 岩橋知子(福岡県春日南中学校), 岩橋宗哉: 重度痴呆性老人の体験を共有しようとする試み 抱える環境としてのプレバーバルな関わり, 心理臨床学研究, 17(1), 55-66, 1999. 17(1), 55-66, 1999.
  - 72) 梶川摩利, 河野理恵, 赤松公子, 野本ひさ, 陶山啓子, 河野保子: 介護老人保健施設における通所リハビリテーション利用者の対人コミュニケーション行動の研究, 高齢者のケアと行動科学, 9(1), 48-56, 2003.
  - 73) 梶川摩利, 河野理恵, 赤松公子, 野本ひさ, 陶山啓子, 河野保子: 研究報告: 介護老人保健施設における通所リハビリテーション利用者の対人コミュニケーション行動の研究, 高齢者のケアと行動科学, 9(1), 48-56, 2003.
  - 74) 町田綾子, 馬場幸, 平田文, 長澤晶子, 飯島節, 原美津子, 福島康圭, 須藤紀子, 秋下雅弘, 江藤文夫, 鳥羽研二: 痴呆性高齢者の認知・言語コミュニケーション能力を短時間で測定する「ミニコミュニケーションテスト-MCT」の開発と信頼性・妥当性の検討, 日本老年医学会雑誌, 40(2), 274-281, 2003.
  - 75) 松山郁夫, 小車淑子: 会話ができない重度痴呆性高齢者に対する介護者の認識, 老年社会科学, 26(1), 78-84, 2004.
  - 76) 小車淑子, 松山郁夫: 会話ができない痴呆性高齢者に対する介護者の意識に関する調査研究, 高齢者のケアと行動科学, 9(2), 63-68, 2004.
  - 77) 武田章敬, 川合圭成, 服部陽子, 渡辺由己, 水野裕, 田畑治, 川村陽一, 柴山漠人, 祖父江元: 痴呆性高齢者に対する簡易コミュニケーションスケール作成の試み, 日本老年医学会雑誌, 41(4), 402-407, 2004.
  - 78) 伊藤麻美子, 泉キヨ子, 天津栄子: 介護老人保健施設入所初期における中等度・重度認知症高齢者相互の交流の様態, 老年看護学, 9(2), 100-108, 2005.
  - 79) 小松光代, 黒木保博, 岡山寧子: 重度認知症高齢者に対する介護スタッフの声かけ音声の特長と声かけプランの可能性を探る, 日本認知症ケア学会誌, 4(1), 32-39, 2005.
  - 80) 松山郁夫, 小車淑子: 痴呆性高齢者の表象能力の評価に関する研究, 高齢者のケアと行動科学, 10(1), 28-36, 2005.
  - 81) 吉川悠貴, 加藤伸司, 阿部哲也, 矢吹知之: 模擬会話場面のVTRを用いた介護職員の発話スタイルの評価, 日本認知症ケア学会誌, 4(1), 51-61, 2005.
  - 82) 湯浅美千代, 野口美和子: 認知症を有する高齢者を肯定的に表現する職員間コミュニケーションの効果, 老年看護学, 10(2), 51-61, 2006.
  - 83) 西田公昭, 山田紀代美: 家族介護者のコミュニケーションスキルとその関連要因の検討, 老年精神医学雑誌, 18(5), 531-539, 2007.
  - 84) 山田紀代美, 西田公昭: 介護スタッフが認知症高齢者に用いるコミュニケーション技法の特徴とその関連要因, 日本看護研究学会雑誌, 30(4), 85-91, 2007.
  - 85) 上田宜子, 青木信雄: 認知症ユニットにおけるコンタクトパーソンの有効性: ケアの質向上と人員削減の両立の可能性を目指して, 日本認知症ケア学会誌, 6(1), 29-37, 2007.
  - 86) 山田紀代美, 西田公昭: 認知症高齢者に用いる看護師のコミュニケーション技法とその関連要因の検討, 老年精神医学雑誌, 18(9), 983-992, 2007.
  - 87) 松山郁夫: 認知症高齢者の認知能力の把握およびコミュニケーションにおける心がけに関する介護職員の認識: 特別養護老人ホームとグループホームの比較, 老年社会科学, 29(1), 48-57, 2007.

- 88) 中谷 淳, 山中克夫, 平田和子, 鈴木せん, 河野禎之, 天野貴史: 認知症高齢者の日常会話場面におけるグループ回想法適用に関する研究: 発話時間と話題の共有時間による相互交流からの検討, 日本認知症ケア学会誌, 7(3), 525-534, 2008.
- 89) 浅井さおり, 沼本教子, 小野光美, 原 祥子: 認知障害のある高齢者と看護師との相互作用場面における看護師のタッチの意味: 機能的側面からの検討, 日本認知症ケア学会誌, 7(1), 51-58, 2008.
- 90) 鎌田ケイ子, 大淵律子, 巻田ふき, 賀集竹子: 痴呆老人の訪問看護に関する研究, 老年社会科学, 7, 168-180, 1985.
- 91) 川村耕造: 特養における痴呆性老人の入所前介護状況についての一考察, 老年社会科学, 8, 62-76, 1986.
- 92) 岡本多喜子: 老年期痴呆の老人の扶養に関する分析枠組み, 社会福祉学, 27(1), 51-79, 1986.
- 93) 岡野純毅(長崎大学 医技短大), 長尾哲男: 障害老人4事例の在宅時と老人デイケア参加時の生活行為の対比, 作業療法, 9(1), 37-44, 1990.
- 94) 原谷珠美, 本間裕子, 山本良子: 痴呆性老人に対する感覚刺激の効果の検討, 日本看護研究学会雑誌, 14(3), 27-32, 1991.
- 95) 金愛利, 竹尾恵子, 木村恵子: 韓国における在宅老人の痴呆症状と介護状況に関する研究, 日本看護科学学会誌, 13(2), 37-44, 1993.
- 96) 寺崎仁, 梅里良正, 久保喜子, 大道久: 病院・老人保健施設・特別養護老人ホームにおける高齢者のケア・サービスに関する比較研究, 日本公衆衛生雑誌, 41(8), 671-681, 1994.
- 97) 宮永和夫, 米村公江, 二階堂亮, 洪澤憲, 山崎学, 喜多川吉欽, 相原芳昭, 内田好司, 宮田マキエ, 真下誠治, 市川欣司, 橋本和博, 宗行彪, 佐々木かほる, 根岸二三代: 群馬県における老人性痴呆疾患患者のケアの現状について, 老年精神医学雑誌, 6(12), 1521-1543, 1995.
- 98) 岡本恵美, 村嶋幸代, 斉藤恵美子: 痴呆性老人とその介護者へのデイケアの意義: デイケアのある日と無い日との比較から, 日本公衆衛生雑誌, 45(12), 1152-1161, 1998.
- 99) 松岡千代, 塩塚優子, 榎谷佳代, 竹崎久美子, 水谷信子, 三上由郁: 痴呆性老人のQOLを高めるケア技術の分析: 看護職への質問紙調査を通して, 老年看護学, 3(1), 64-71, 1998.
- 100) 細谷たき子: 在宅痴呆性老人への日常生活支援体制達成までの期間に影響する要因, 日本在宅ケア学会誌, 3(1), 87-93, 1999.
- 101) 高野真由美, 堀幸子, 小窪和博: 在宅痴呆老人介護状況実態調査, 厚生指標, 46(7), 12-16, 1999.
- 102) 酒井泰一, 森敏, 金山政喜, 中島健二: 痴呆性老人の精神・身体状況は施設入所後2年間にどう変化したか: 高齢者アセスメント表による検討, 日本老年医学会雑誌, 38(2), 185-192, 2001.
- 103) 高山成子, 水谷信子: 中等度・重度痴呆症高齢者に残された現実認識の力についての研究: 看護者との対話から, 日本看護科学会誌, 21(2), 46-55, 2001.
- 104) 小向井英記(服部記念病院), 桐田忠昭, 露木基勝, 杉村正仁: 超高齢化地域における身体障害老人と痴呆性老人の生活状況及び口腔内状況の課題とその対策についての検討(第1報) 生活状況と口腔機能障害・口腔疾患・義歯の状況について, 老年歯科医学16(1), 55-64, 2001.
- 105) 小向井英記(服部記念病院), 桐田忠昭, 露木基勝, 杉村正仁: 超高齢化地域における身体障害老人と痴呆性老人の生活状況及び口腔内状況の課題とその対策についての検討(第2報) 生活状況と歯, 歯肉の状況・口腔内の状況, その関連性について, 老年歯科医学16(2), 228-235, 2001.
- 106) 赤澤寿美, 岩森恵子, 原田能之, 前原貴美枝, 山村安弘: 痴呆性高齢者の在宅介護長期継続と介護中断に影響する因子の検討, 日本地域看護学会誌, 4(1), 76-82, 2002.
- 107) 森田久美子, 島内節, 友安直子, 清水洋子, 内田陽子: 訪問看護利用者におけるアウトカム変化の検討: 自立度と痴呆の程度による比較, 日本在宅ケア学会誌, 6(1), 43-50, 2002.
- 108) 小松光代, 黒木保博, 岡山寧子: 介護老人福祉施設における痴呆性高齢者ケア技術の明確化: 介護

- スタッフの日常生活援助場面への参加観察による質的分析, 日本痴呆ケア学会誌, 2, (1), 56-67, 2003.
- 109) 内田陽子: 介護老人保健施設入所者のケアニーズとリスクに対する介護に関する研究, 日本看護管理学会誌, 7(1), 36-42, 2003.
- 110) 沖田裕子, 中田康夫: 在宅痴呆性高齢者のニーズをもとにしたアセスメントの留意点, 老年看護学, 7(2), 93-104, 2003.
- 111) 松村菜穂美: 痴呆デイケア施設における痴呆度と寝たきり度と介助量の関係: 要介護者の介助量測定から, 季刊社会保障研究, 39(2), 189-203, 2003.
- 112) 原等子, 中島紀恵子: 痴呆性高齢者の家族介護時間の特性: 家族介護主担者の時間的様相, 老年看護学, 7(2), 70-82, 2003.
- 113) 六角僚子: 痴呆性高齢者の生活史構成とそのケアへの活用の試み, 老年看護学, 7(2), 127-136, 2003.
- 114) 小関祐二, 長谷川浩子, 松永佳子: グループホームにおけるコンピュータを活用した利用者処遇情報の共有とその効果, 日本痴呆ケア学会誌, 3(2), 203-213, 2004.
- 115) 内田陽子, 山崎京子: 痴呆高齢者のアウトカムを高める通所介護の取り組みと評価, 日本在宅ケア学会誌, 8(1), 2, 73-81, 2004.
- 116) 森川千鶴子(呉大学 看護学部看護学科): 痴呆性高齢者の生活活性化と看護学生の関わり MDS2.1アセスメント項目の検討から, 日本看護福祉学会誌9(2), 136-144, 2004.
- 117) 西山みどり: とともに暮らす高齢者の認知症発症に伴う主介護者の生活再編成, 老年看護学, 9(2), 85-91, 2005.
- 118) 宮上多加子: 家族の痴呆介護実践力の構成要素と変化のプロセス: 家族介護者16事例のインタビューを通して, 老年社会科学, 26(3), 330-339, 2005.
- 119) 標美奈子: 認知症者介護経験と家族の会役員活動をつなぐ内面的理由, 老年看護学, 10(1), 116-123, 2005.
- 120) 野村美千江, 大名門裕子: 農村に暮らす初期痴呆高齢者と配偶者の生活特性とその全体像, 日本看護研究学会雑誌, 28(1), 91-100, 2005.
- 121) 福田珠恵: 老年期に痴呆症という病を生きる体験: 『自己の存在の確かさを求めて』: 病の兆候からグループホーム入居後まで, 日本看護科学会誌, 25(3), 41-50, 2005.
- 122) 鈴木みずえ, 金森雅夫, グライナー智恵子, 伊藤薫, 大城一: 日本語版 Dementia Quality of Life Instrument(DQoL-Japanese Version)を用いた認知症高齢者の主観的 Quality of Life に関する縦断評価, 日本老年医学会雑誌, 43(4), 485-491, 2006.
- 123) 溝田順子, 横山正博: 認知症高齢者グループホームにおける生活共有の有用性, 日本痴呆ケア学会誌, 5(3), 471-479, 2006.
- 124) 種橋征子: 個別ケアを阻害する要因に関する研究: 特別養護老人ホームにおける認知症高齢者担当介護職員の個別ケア実践と仕事上の負荷の現状, 介護福祉学, 14(1), 46-65, 2007.
- 125) 野村美千江, 豊田ゆかり, 中平洋子, 柴珠実, 宮内清子: 初期認知症者の自動車運転中止の過程とその関連要因, 日本地域看護学会誌, 9(2), 53-59, 2007.
- 126) 松田千登勢: 短期入所を利用する認知症高齢者の家族とケア提供者が伝え合いたい情報, 老年看護学, 12(2), 68-74, 2008.
- 127) 奥村朱美, 内田陽子: 介護老人保健施設入所中の認知症高齢者のニーズの特徴, 老年看護学, 13(2), 97-103, 2009.
- 128) 鈴木みずえ, 水野 裕, グライナー智恵子, 深堀敦子, 磯和勅子, 坂本涼子, 宮園美沙子, 出口克巳, 金森雅夫, Dawn Brooker: 重度認知症病棟における認知症ケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケアに関する介入の効果, 老年精神医学雑誌, 20(6), 668-680, 2009.

- 129) 渡辺陽子, 高山成子: 施設で生活する中等度・重度認知症高齢者の自己決定の機会を提供する看護介入の効果, 老年看護学, 14(1), 5-15, 2010.
- 130) 堀内園子: 認知症ケアの専門性: デイケア看護師による認知症高齢者の「鉦脈を掘り当てる関わり」と「磁場」の形成, 日本看護研究学会雑誌, 33(2), 35-48, 2010.
- 131) 北島洋美, 杉澤秀博: 認知症末期にある特別養護老人ホーム入居者に対する介護スタッフのケアプロセス, 社会福祉学, 51(1), 39-52, 2010.
- 132) 鳶野沙織, 新鞍真理子, 下田裕子, 東海奈津子, 寺西敬子, 山田雅奈恵, 田村一美, 山口悦子, 永森睦美, 上坂かず子, 成瀬優知: 要介護認定を受けた認知症高齢者の日常生活自立度の変化と認知症に関連する症状項目の変化, 厚生指針, 57(6), 25-32, 2010.
- 133) 宮永和夫, 米村公江, 荒井節子, 斉藤芳雄, 権平達二郎: 若年発症痴呆についての疫学調査報告, 老年精神医学雑誌, 4(9), 1029-1033, 1993.
- 134) 沖田裕子, 岡本玲子: 若年認知症の家族が必要としている支援内容とその時期, 日本痴呆ケア学会誌, 5(3), 480-491, 2006.
- 135) 岡正寛子, 西川潤子: 若年性認知症理解の要因: 福祉系大学生の若年性認知症者へのイメージの視点から, 介護福祉学, 17(2), 136-145, 2010.
- 136) 鈴木亮子, 森 明子, 小長谷陽子: 若年認知症の人の家族を支援するうえでの課題, 日本認知症ケア学会誌, 9(1), 73-82, 2010.

### III - 1 - 2) - (3)

- 1) Cohen U, Weisman GD: Holding On to Home; Designing Environments for People with Dementia. The Johns Hopkins University Press(1991). (岡田威海監訳, 浜崎裕子訳: 痴呆性老人のための環境デザイン. 彰国社, 東京, 1995).
- 2) 外山義: 自宅でない在宅: 高齢者の生活空間論. 医学書院, 東京(2003).
- 3) 児玉桂子, 足立啓, 下垣光, 潮谷有二編: 認知症高齢者が安心できるケア環境づくり; 実践に役立つ環境評価と整備手法. 彰国社, 東京(2009).
- 4) 日本建築学会編: 認知症ケア環境事典; 症状・行動への環境対応 Q&A. ワールドプランニング, 東京(2009).
- 5) 妹尾弘幸, 岡浩一郎: 障害物の輝度と認知症高齢者のまたぎ動作との関係. 日本認知症ケア学会誌, 6(3): 495-502(2007).
- 6) 雨宮洋子, 杉山記代江, 雨宮克彦: 痴呆性高齢者のドア, 段差の視覚認知に関する実践的研究. 高齢者のケアと行動科学, 5: 111-122(1998).
- 7) 足立啓, 荒木兵一郎: 屋内歩行時の視覚誘導情報への痴呆性老人と精神薄弱者の注視に関する実験的研究. 日本建築学会計画系論文報告集, 439: 55-63(1992).
- 8) 足立啓, 荒木兵一郎: 動的誘導情報に対する注視特性の検討; 痴呆性老人と精神薄弱者の視覚情報探索行動に関する研究 第2報. 日本建築学会計画系論文集, 447: 43-49(1993).
- 9) 足立啓, 赤木徹也: ホール状空間における視覚情報探索行動; 屋内歩行時の視覚誘導情報への痴呆性老人と精神薄弱者の注視に関する実験的研究 その2. 日本建築学会計画系論文集, 512: 101-105(1998).
- 10) 足立 啓, 赤木徹也, 小林敏子: 痴呆性老人の屋内探索歩行時における連続的誘導情報の有効性について. 日本建築学会計画系論文集, 514: 87-93(1998).
- 11) 足立啓, 赤木徹也: 痴呆性老人と知的障害者の屋内歩行空間における BARRIER に対する注視特性. 日本建築学会計画系論文集, 522: 171-178(1999).
- 12) 大橋美幸: 痴呆性老人の認知障害特性と補助環境; 場所の同定障害に関して. 理学療法科学, 13(1): 17-22(1998).
- 13) 大橋美幸: 痴呆性老人の記憶障害に対する外的補助の有効性; 理学療法科学, 13(2): 61-65(1998).

- 14) 工藤夕貴, 篠田美紀, 中西亜紀他: 「懐かしの間」を活用したグループ回想法の試み; アルツハイマー型認知症高齢者を対象とした事例より. 老年社会科学, 29(3): 403-411(2007).
- 15) 佐々木心彩, 羽生和紀, 長嶋紀一: 高齢者の施設適応度測定指標の開発; 痴呆の程度と居室の個人化からの検討. 老年社会科学, 26(3): 289-295(2004).
- 16) 毛束忠由, 金子るり子, 松房利憲他: 生活環境の変化が老人ホーム入所者に与えた影響; GBS 尺度による痴呆群と非痴呆群の比較. 作業療法, 15(1): 39-48(1996).
- 17) 黄炳峻, 鈴木義弘: グループホームにおける居住者の生活行為の分析と課題について; 認知症高齢者グループホームでの生活に居室水準が与える影響に関する研究 第2報. 日本建築学会計画系論文集, 664: 1063-1071(2011).
- 18) 山田あすか, 上野淳, 登張絵夢他: 痴呆性高齢者グループホームにおける居住者による固有の居場所の選択とその要因. 日本建築学会計画系論文集, 556: 145-152(2002).
- 19) 大橋美幸, 水野弘之, 小滝一正: 痴呆性老人の家族による「住まいと住み方に関する工夫」の手法; 痴呆性老人に対する住居改善に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 527: 93-98(2000).
- 20) 大島千帆, 児玉桂子: 認知症高齢者の状態像に基づく類型化と類型別にみる在宅環境配慮の効果; 介護支援専門員への調査から. 日本建築学会計画系論文集, 665: 1205-1212(2011).
- 21) 大島千帆, 児玉桂子, 後藤隆他: 痴呆性高齢者の在宅環境整備に関する研究; 家族介護者の自由記述に基づく住居配慮の次元. 日本痴呆ケア学会誌, 3(1): 30-40(2004).
- 22) 土居加奈子, 足立啓: 在宅認知症高齢者の周辺症状と物理的環境が介護者への関わりに及ぼす影響. 日本建築学会計画系論文集, 623: 17-22(2008).
- 23) 中祐一郎, 林玉子, 小滝一正他: 痴呆性老人の排泄ケア動線からみた平面計画の検討; 痴呆性老人専門介護施設の建築計画に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 459: 59-68(1994).
- 24) 石井敏, 巖爽, 外山義他: 先進事例にみる共用空間の構成と生活の関わり; 痴呆性高齢者のためのグループホームに関する研究 その1. 日本建築学会計画系論文集, 524: 109-115(1999).
- 25) 石井敏, 長澤泰: 生活行動に影響を与える環境構成要素; 痴呆性高齢者のためのグループホームに関する研究(その2). 日本建築学会計画系論文集, 553: 123-129(2002).
- 26) 大川美佐子, 中村貴志, 野瀬真由美他: 生活環境が異なるグループホームにおける痴呆性高齢者の生活行動. 高齢者のケアと行動科学, 9(2): 50-62(2004).
- 27) 石井敏, 外山義, 長澤泰: グループホームにおける生活構成と空間利用の特性; 痴呆性老人の環境構築に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 502: 103-110(1997).
- 28) 天田城介: 施設入所痴呆性老人の移動特性と相互作用の頻度・空間に関する研究. 高齢者のケアと行動科学, 6: 46-57(1999).
- 29) 三宮基裕, 片岡正喜, 鈴木義弘: 痴呆性高齢者の居住施設環境整備に関する基礎的研究; アルツハイマー型と脳血管性の生活行動特性とその比較. 日本建築学会計画系論文集, 560: 111-118(2002).
- 30) 永原聖, 石井敏, 松本啓俊: 痴呆性老人の施設形態別にみたケアの実態に関する解析的考察; 小規模居住形態の有効性の実証に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 514: 79-86(1998).
- 31) 鈴木健二, 外山義, 三浦研: 痴呆性高齢者のグループホームにおける入居者の生活の再編過程; 痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究(1). 日本建築学会計画系論文集, 546: 121-126(2001).
- 32) 鈴木健二, 外山義, 三浦研: 痴呆性高齢者グループホームにおける入居者の生活とスタッフのケアの相互浸透; 痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究(2). 日本建築学会計画系論文集, 552: 125-131(2002).
- 33) 鈴木健二, 外山義, 三浦研: 痴呆性高齢者グループホームにおける空間の構成と入居者の生活・スタッフのケアの展開; 痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究(3). 日本建築学会計画系論文集, 556: 169-176(2002).
- 34) 鈴木健二, 外山義, 三浦研: 痴呆性高齢者グループホームにおけるスタッフの空間利用とケアの質的

特性；痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究(4). 日本建築学会計画系論文集, 563: 163-170 (2003).

- 35) 巖爽, 石井敏, 菅野實: 空間と運営・介護からみた新築型および既存建物活用型痴呆性高齢者グループホームの相違に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 588: 23-30(2005).
- 36) 黒木宏一, 横山俊祐: 認知症高齢者グループホームにおける入居者の過ごし方からみた「生活の質」の評価; 民家改修型の空間特性による過ごし方の展開. 日本建築学会計画系論文集, 618: 17-24(2007).
- 37) 山田あすか: 民家改修型認知症高齢者グループホームにおける空間構成と入居者の滞在場所に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 638: 781-790(2009).
- 38) 小原博之, 松本啓俊, 外山義: 痴呆性老人施設の建築計画に関する基礎的研究; 住環境変化を視点とした事例的研究. 日本建築学会計画系論文集, 459: 47-57(1994).
- 39) 巖爽, 石井敏, 外山義他: グループホームにおける空間利用の時系列的変化に関する考察; 「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究(その1). 日本建築学会計画系論文集, 523: 155-161 (1999).
- 40) 巖爽, 石井敏, 橘弘志他: 介護体制と入居者の生活構成の関わりに関する考察; 「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究(その2). 日本建築学会計画系論文集, 528: 111-117(2000).
- 41) 巖爽, 石井敏: 継続的な視点からみた痴呆性高齢者グループホームの環境とその変容に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 569: 55-62(2003).
- 42) 山田あすか, 上野淳: 痴呆性高齢者グループホームの環境及び入居者の固有の居場所とその変容に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 592: 93-100(2005).
- 43) 巖爽, 石井敏, 長澤泰: 生活環境の移行とターミナルケアの視点からみた痴呆性高齢者グループホームのあり方に関する考察. 日本建築学会計画系論文集, 557: 165-171(2002).
- 44) 黒木宏一, 横山俊祐: 認知症高齢者グループホームにおける重度入居者の過ごし方の特性と空間の評価. 日本建築学会計画系論文集, 629: 1449-1456(2008).
- 45) 松原茂樹, 足立啓, 赤木徹也他: 会話状況からみる痴呆性高齢者の交流の変容に関する考察; 痴呆性高齢者のグループリビングへの移行に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, 545: 137-142(2001).
- 46) 加藤悠介, 今井朗, 石川進他: 特別養護老人ホームの環境改修が認知症高齢者の行動に及ぼす影響. 日本認知症ケア学会誌, 6(3): 486-494(2007).
- 47) 白井みどり, 白井キミカ, 今川真治他: 認知症高齢者の感情反応と行動に基づく個別的な生活環境評価とその効果. 日本認知症ケア学会誌, 5(3): 457-470(2006).
- 48) 絹川麻里, 濱田泰子, 三浦研他: 外出行動が施設居住認知症高齢者の精神面に与える影響. 日本建築学会計画系論文集, 592: 17-24(2005).
- 49) 池田志保子: サテライトケアが要介護高齢者の精神機能に及ぼす影響. 厚生指標, 53(3): 1-7(2006).
- 50) 絹川麻里, 外山義, 三浦研: グループホーム居住痴呆性高齢者の地域生活の構造に関する研究; 都市型グループホーム入居者の外出行動による事例的考察. 日本建築学会計画系論文集, 564: 157-164(2003).
- 51) 川岸梅和, 染谷佐登子, 梅木千恵子: 痴呆性高齢者のグループホームと周辺環境の関係性に関する研究; 千葉県内のグループホームにおけるケーススタディ. 日本建築学会計画系論文集, 580: 141-147 (2004).
- 52) 巖爽: 認知症高齢者の在宅生活を支えるネットワークケアの構築に関する事例考察. 日本建築学会計画系論文集, 642: 1717-1725(2009).

### III-1-2)-(4)

- 1) 人見裕江, 寺田准子, 中村陽子, 畝 博, 小河孝則, 斎藤美智子, 郷木義子, 岡 京子, 森山美恵子, 廣野祥子(2005). 認知症ケアに関する施設管理職の意識. 厚生指標, 52, 39-46.
- 2) 堀口由美子(1999). 痴呆性老人に接する時に感じる困難の処理のされ方: 老人看護実習指導方法の向

- 上をねらいとして. 老年看護学, 4, 88-97.
- 3) 栗須 妙, 堀尾 栄, 原田重樹, 落合将則, 西元幸雄, 川村耕造(1994). 特別養護老人ホームにおける痴呆性老人の処遇の工夫について. 老年社会科学, 15, 125-135.
  - 4) 三浦和夫, 加藤伸司(2009). 認知症の行動・心理症状に対する介護職員のとらえ方と研修との関係について: 在職年数別にみる内部研修の有効性. 日本認知症ケア学会誌, 8, 51-59.
  - 5) 森川千鶴子(2004). 痴呆性高齢者の生活活性化と看護学生の関わり: MDS2.1アセスメント項目の検討から. 日本看護福祉学会誌, 9, 136-144.
  - 6) 小野寺敦志, 松浦美知代, 畦地良平, 内藤圭之(2006). 認知症介護専門棟職員に対する職場内研修の試み: パフォーマンス・マネジメントを用いた取り組みの効果検証. 日本認知症ケア学会誌, 5, 403-415.
  - 7) 鈴木みずえ, 水野 裕, グライナー智恵子, 深堀敦子, 磯和勅子, 坂本凉子, 宮園美沙子, 出口克巳, 金森雅夫, Dawn Brooker(2009). 重度認知症病棟における認知症ケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケアに関する介入の効果. 老年精神医学雑誌, 20, 668-680.
  - 8) 田高悦子, 川越博美, 宮本有紀, 緒方泰子, 門田直美(2007). 認知症ケア専門特化型訪問看護ステーションにおけるサービスの質の評価基準の開発. 老年看護学, 11, 64-73.
  - 9) 竹本与志人, 内藤絵里, 馬塩智恵子, 宗好祐子, 橋本智江, 濱口須美, 忠田正樹, 堀部 徹, 香川幸次郎(2005). 認知症高齢者のケアマネジメントにおける介護支援専門員の社会保障制度の理解と活用状況: 医療職と福祉職との比較を通して. 厚生の指標, 52, 15-20.
  - 10) 照井孫久, 野村豊子(2006). 認知症ケアにおけるチームケア自己評価モデルの検討. 日本認知症ケア学会誌, 5, 416-425.
  - 11) 上田宜子, 青木信雄(2007). 認知症ユニットにおけるコンタクトパーソンの有効性: ケアの質向上と人員削減の両立の可能性を目指して. 日本認知症ケア学会誌, 6, 29-37.
  - 12) 吉本知恵, 横川絹恵(2007). 看護学生の認知症高齢者に対するイメージの変化およびその影響体験: 老年看護学実習に焦点を当てて. 日本看護福祉学会誌, 12, 67-77.
  - 13) 若山好美, 工藤禎子, 竹生礼子, 佐藤美由紀(2010). 認知症キャラバンメイトの活動志向性とその関連要因. 日本在宅ケア学会誌, 13, 34-41.

### Ⅲ-1-2)-(5)

- 1) 野見山直子(藍野病院), 山口隆司, 佐々木珠代, 他: 痴呆老人に対するパズルの検討, 作業療法, 7(3), 616-619, 1988.
- 2) 竹川忠男, 杉山善朗, 中村浩, 佐藤豪, 浦沢喜一, 森本正美: 「高研協式痴呆スケール」の作成に関する研究, 社会老年学, 31, 69-79, 1990.
- 3) 生地新, 渡部由里, 森岡由紀子, 岩崎清, 井原一成, 安村誠司: 地域における在宅痴呆老人のスクリーニング法に関する検討, 老年社会科学, 12, 71-84, 1990.
- 4) 北川公子, 中島紀恵子, 工藤禎子: 痴呆性老人のショートステイ利用に関する状態評価の研究, 社会老年学, 34, 67-76, 1991.
- 5) 本間昭, 新名理恵, 石井徹郎, 長谷川和夫: 老年期痴呆を対象とした精神機能障害評価票の作成, 老年精神医学雑誌, 2(10), 1217-1222, 1991.
- 6) 中島紀恵子, 工藤禎子, 尾崎新, 芳賀博: デイケアにおける痴呆性老人に対する生活健康スケール作成の試み, 社会老年学, 36, 39-49, 1992.
- 7) 溝口環, 飯島節, 江藤文夫, 石塚彰映, 折茂肇: DBD スケール(Dementia Behavior Disturbance Scale)による老年期痴呆患者の行動異常評価に関する研究, 日本老年医学会雑誌, 30(10), 835-840, 1993.
- 8) 池田歳視, 高橋幹治, 松尾卓久, 兼行浩史, 秋元隆志, 増本茂樹, 山田通夫: 山大式痴呆評価スケール

- ルの臨床的有用性に関する検討－Mattis dementia rating scale 日本語版の作成－, 老年精神医学雑誌, 4(2), 169-180, 1993.
- 9) 朝田隆, 吉岡充, 森川三郎, 小山秀夫, 北島英治, 川崎光洋, 木之下徹, 浅香昭雄: 痴呆患者の問題行動評価票(TBS)の作成, 日本公衆衛生雑誌, 41(6), 518-527, 1994.
  - 10) 星野良一, 宮里勝政, 岡本典雄, 近藤直樹, 大原健士郎, 有馬良一: アルツハイマー型老年痴呆と脳血管性痴呆の認知機能に関する比較研究, 老年精神医学雑誌, 5(1), 63-71, 1994.
  - 11) 朝田隆, 吉岡充, 森川三郎, 小山秀夫, 北島英治, 川崎光洋, 木之下徹, 浅香昭雄: 痴呆患者に対する介護者よりみた基本的介助状況評価票(ABCD)の作成, 日本公衆衛生雑誌, 41(2), 105-113, 1994.
  - 12) 石川みち子, 榎田俊邦, 井上勝也: 痴呆性老人の徘徊行動と骨密度に関する一考察－1万メートルのパラドックス－, 高齢者のケアと行動科学, 2, 104-117, 1995.
  - 13) 溝口環, 飯島節, 新野直明, 折茂肇: Cost of Care Index を用いた老年患者の介護負担度の検討, 日本老年医学会雑誌, 32(6), 403-409, 1995.
  - 14) 山田孝(秋田大学 医技短大), 竹原敦: 日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査(JMAP)項目を用いた単一システムデザインによる老年痴呆患者に対する感覚統合的アプローチの効果, 作業療法, 15(4), 322-335, 1996.
  - 15) 北島英治: 高齢者の介護必要度に関する ADL 尺度と痴呆尺度を利用した数量化モデルの研究－ファジ理論を中心に－, 老年社会科学, 19(1), 11-21, 1997.
  - 16) 山内慶太, 池上直己: 介護保険下での痴呆の評価方法に関する研究－Cognitive Performance Scale (CPS)の信頼性と妥当性－老年精神医学雑誌, 10(8), 943-952, 1999.
  - 17) 浅川典子, 高崎絹子, 旭俊臣, 吉山容正: 在宅痴呆性老人の主介護者の介護負担感の関連要因－日常問題となる行動との関連を中心として－, 日本在宅ケア学会誌, 2(1), 32-40, 1999.
  - 18) 木之下明美, 朝田隆: 在宅痴呆性老人に対する介護にかかわる社会・家庭的負担評価票(CBS)の作成とその臨床的意義の検討, 老年社会科学, 21(1), 76-85, 1999.
  - 19) 山田律子, 磯田順子, 中島紀恵子, 北川公子, 井出訓, 佐藤恵美子, 依本正恵: 痴呆の程度別「摂食リズムの乱れ」の特徴－作成したシートを用いて－老年看護学, 4(1), 73-82, 1999.
  - 20) 日下菜穂子: 痴呆性老人に実施した高齢者用絵画統覚検査(PAAM)の有効性と心理的特性に関する研究, 老年社会科学, 21(1)62-75, 1999.
  - 21) 朝田隆, 本間昭, 木村通宏, 宇野正威: 日本語版 BEHAVE-AD の信頼性について, 老年精神医学雑誌, 10(7), 825-834, 1999.
  - 22) 川本龍一: 痴呆の簡便なるスクリーニング検査法－時刻・勘定テスト－, 日本公衆衛生雑誌, 47(6), 486-492, 2000.
  - 23) 渡辺恭子, 西川志保, 西川洋, 銚石和彦, 繁信和恵, 塩田一雄, 松井博, 池田学: 痴呆症状を呈する高齢者における痴呆用愛媛式音楽療法評価表の有用性, 老年精神医学雑誌, 11(7), 805-814, 2000.
  - 24) 本多雅亮, 吉山容正, 渡邊晶子, 角田恵麻, 旭俊臣: デイケアプログラムにおける痴呆患者の表情による心理評価スケールの作成, 老年精神医学雑誌, 12(7), 787-793, 2001.
  - 25) 宮本有紀, 伊藤弘人, 立森久照, 松岡恵子, 稲庭千弥子, 大塚俊男, 森村安史, 平井基陽: 介護老人保健施設痴呆専門棟入所者の要介護度は認知機能を反映しているか, 老年精神医学雑誌, 12(10), 1169-1175, 2001.
  - 26) 金森雅夫, 鈴木みずえ, 山本清美, 神田政宏, 松井由美, 小嶋永実, 竹内志保美, 大城一: 痴呆性老人デイケアでの動物介在療法の試みとその評価方法に関する研究, 日本老年医学会雑誌, 38(5), 659-664, 2001.
  - 27) 松田修, 斎藤正彦, 黒川由紀子, 宮本典子, 丸山香, 松田英江, 中谷美保子: 日本語版 Neurobehavioral Cognitive Status Examination(NCSE)の作成－信頼性と妥当性の検討(第1報)－老年精神医学雑誌, 12(10), 1177-1187, 2001.

- 28) 石崎淳一(東北大学 医系研究)：コラージュに見る痴呆高齢者の内的世界－中等度アルツハイマー病患者の作品から－, 心理臨床学研究, 19(3), 278-289, 2001.
- 29) 柴田雄企(九州大学 人間環境研究院)：SAT(高年者絵画統覚検査)の軽度痴呆性高齢者への有効性－痴呆のない高齢者との比較－, 心理臨床学研究, 19(4), 342-352, 2001.
- 30) 小野寿之, 玉井顯, 岩田恒星：痴呆症状評価尺度 Assessment Scale for Symptoms of Dementia(ASSD)の信頼性・妥当性に関する検討, 老年精神医学雑誌, 13(2), 191-204, 2002.
- 31) 坂井康純, 福田耕嗣, 寺嶋康, 星野良一, 森川将行, 宮内利郎, 岸本年史, 石田孜郎：痴呆性疾患における行動心理学的症候(behavioral and psychological symptoms of dementia ; BPSD)の臨床評価に対する検討－臨床簡易評価スケール作成の試み－, 老年精神医学雑誌, 13(11), 1299-1305, 2002.
- 32) 森本美奈子, 柿木達也, 柏木哲夫, 前田潔：アルツハイマー型痴呆患者の Quality of Life 評価尺度「Dementia Happy Check - HomeCare Version -」の開発, 老年精神医学雑誌, 13(9), 1051-1060, 2002.
- 33) 酒井泰一, 森敏, 中嶋健二：介護保険の基本調査項目から要介護度を推定する樹型図の開発, 日本老年医学会雑誌, 39(5), 537-544, 2002.
- 34) 川口裕見, 佐藤眞一：痴呆性高齢者の認知能力の他者評価に関する研究, 高齢者のケアと行動科学, 8(2), 37-45, 2002.
- 35) 町田綾子, 馬場幸, 平田文, 長澤晶子, 飯島節, 原美津子, 福島康圭, 須藤紀子, 秋下雅弘, 江藤文夫, 鳥羽研二：痴呆性高齢者の認知・言語コミュニケーション能力を短時間で測定する「ミニコミュニケーションテスト-MCT」の開発と信頼性・妥当性の検討, 日本老年医学会雑誌, 40(2), 274-281, 2003.
- 36) 藤原佳典, 天野秀紀, 高林幸司, 熊谷修, 吉田祐子, 吉田裕人, 森節子, 渡辺修一郎, 森田昌宏, 永井博子, 新開省二：地域在宅高齢者における認知機能低下者の生活機能の評価－本人と家族の評価における乖離の関連要因－, 日本老年医学会雑誌, 40(5), 487-496, 2003.
- 37) 鈴木みず, 渡邊素子, 竹内幸子, 松下貴美子, 小川佳子, 櫻庭繁, 小林貴子, 伊藤実穂, 小島永実, 大城一, 松本友子, 中原大一郎, 金森雅夫：痴呆性高齢者の音楽療法の評価手法に関する研究, 老年精神医学雑誌, 14(4), 451-462, 2003.
- 38) 山上徹也, 山口晴保：痴呆発症期における視覚入力認知機能テストの得点低下とその背景, 老年精神医学雑誌, 14(9), 1125-1132, 2003.
- 39) 松田修, 熊沢佳子, 櫻庭幸恵, 松田英江, 中谷三保子, 斎藤正彦：日本語版 Neurobehavioral Cognitive Status Examination(NCSE)の作成(第2報), 老年精神医学雑誌, 14(4), 475-483, 2003.
- 40) 武田章敬, 川合圭成, 服部陽子, 渡辺由己, 水野裕, 田畑治, 川村陽一, 柴山漠人, 祖父江元：痴呆性高齢者に対する簡易コミュニケーションスケール作成の試み, 日本老年医学会雑誌, 41(4), 402-407, 2004.
- 41) 柴田雄企：痴呆性高齢者に対するグループ回想法のSAT(高年者用絵画統覚テスト)による効果評価, 高齢者のケアと行動科学, 9(2), 42-49, 2004.
- 42) 筒井孝子(国立保健医療科学院 福祉サービス部), 東野定律：痴呆性高齢者の在宅介護の特徴からみた要介護認定のあり方に関する研究, Health Sciences, 20(1), 70-81, 2004.
- 43) 松山郁夫, 小車淑子：痴呆性高齢者の表象能力の評価に関する研究, 高齢者のケアと行動科学, 10(1), 28-36, 2005.
- 44) 佐々木心彩, 羽生和紀, 長嶋紀一：高齢者の施設適応度測定指標の開発－痴呆の程度と居室の個人化からの検討－, 老年社会科学, 26(3), 289-295, 2005.
- 45) 寺岡佐和, 小西美智子, 鎌田ケイ子：地域高齢者の日常・社会生活の状況と物忘れ自覚症状との関連性－認知症のリスクスクリーニングとして－, 日本公衆衛生雑誌, 52(10), 853-864, 2005.
- 46) 鈴木みずえ, 金森雅夫, 長澤晋吾, 猿原孝行：痴呆高齢者の音楽療法における行動障害, ストレス,

- 免疫機能に関する評価手法の検討, 日本老年医学会雑誌, 42(1), 74-82, 2005.
- 47) 鈴木みずえ, 内田敦子, 金森雅夫, 大城一: 日本語版 Dementia Quality of Life Instrument の作成と信頼性・妥当性の検討, 日本老年医学会雑誌, 42(4), 423-431, 2005.
- 48) 中島民恵子, 永田久美子, 平林景子: 認知症高齢者グループホームのサービス評価結果の活用に関する研究-自己評価と外部評価との総合的分析をとおして-, 日本認知症ケア学会誌, 4(1), 62-72, 2005.
- 49) 北村世都, 時田学, 菊池真弓, 長嶋紀一: 認知症高齢者の家族介護者における家族からの心理的サポートニーズ充足状況と主観的 QOL の関係, 厚生学, 52(8), 33-42, 2005.
- 50) 永井真由美: 認知症高齢者の家族介護力評価とその関連要因, 老年看護学, 10(1), 4-40, 2005.
- 51) 渡辺晴子: 認知症高齢者の社会的行動に関連する生活の質スケール開発の試み, 日本の地域福祉, 19, 26-38, 2005.
- 52) 奥村由美子, 谷向知, 久世淳子: 認知症高齢者への回想法における評価方法および実施回数に関する研究, 日本認知症ケア学会誌, 4(1), 24-31, 2005.
- 53) 小澤芳子(筑波大学 大学院人間総合科学研究科), 戸村成男: 認知症高齢者の介護者による介護評価, プライマリ・ケア, 28(3), 149-154, 2005.
- 54) 照井孫久, 野村豊子: 認知症ケアにおけるチームケア自己評価モデルの検討, 日本痴呆ケア学会誌, 5(3), 416-425, 2006.
- 55) 酒井佳永, 小高愛子, 村山憲男, 高野真喜, 広瀬克紀, 江渡江, 新井平伊: 認知症スクリーニング検査 the Rapid Dementia Screening Test(RDST)日本語版の有用性, 老年精神医学雑誌, 17(5), 539-552, 2006.
- 56) 白井みどり, 白井キミカ, 今川真治, 黒田研二: 認知症高齢者の感情反応と行動に基づく個別的な生活環境評価とその効果, 日本痴呆ケア学会誌, 5(3), 457-470, 2006.
- 57) 大島千帆, 児玉桂子, 後藤隆, 足立啓, 三宅貴夫: 認知症高齢者の状態像に対応する在宅環境配慮評価軸の抽出-テキストマイニングを用いた家族介護者の自由記述回答の分析-, 老年社会科学, 28(3), 334-347, 2006.
- 58) TsutsuiTakako(日本大学 医学部), HigashinoSadanori, TanedaAya, YajimaYuki, KirinoMasafumi, NakajimaKazuo: わが国における Zarit Burden Interview の因子構造の検討に関する研究(Research regarding studies of the factor structure of the Zarit Burden Interview), 日本保健科学学会誌, 9(1), 5-15, 2006.
- 59) 佐藤美和子, 長田久雄: 認知症の行動・心理症状(BPSD)リストの作成の試み-介護福祉従事者の BPSD の理解と対応の実態を通して-, 高齢者のケアと行動科学, 13(1), 41-52, 2007.
- 60) 森明子, 杉村公也: 女性高齢者の手段的日常生活活動能力と日常記憶能力の特徴-早期認知症の能力評価法の検討-, 日本老年医学会雑誌, 44, 470-475, 2007.
- 61) 田高悦子, 川越博美, 宮本有紀, 緒方泰子, 門田直美: 認知症ケア専門特化型訪問看護ステーションにおけるサービスの質の評価基準の開発, 老年看護学, 11(2), 64-73, 2007.
- 62) 羽生春夫, 佐藤友彦, 赤井知高, 酒井稔, 高崎朗, 岩本俊彦: 老年期認知症患者の病識-生活健忘チェックリストを用い, 介護者を対照とした研究-日本老年医学会雑誌, 44, 463-469, 2007.
- 63) 安部幸志, 荒井由美子: 一般生活者を対象とした認知症の症状に対する援助希求行動尺度の作成とその信頼性および妥当性の検討, 老年精神医学雑誌, 19(4), 451-160, 2008.
- 64) 鈴木みずえ, 水野裕, Dawn Brooker, 住垣千恵子, 坂本涼子, 内田敦子, グライナー智恵子, 大城一, 金森雅夫: Quality of life 評価手法としての日本語版認知症ケアマッピング(Dementia Care Mapping: DCM)の検討- Well-being and Ill-being Value (WIB 値)に関する信頼性・妥当性-, 日本老年医学会雑誌, 45(1), 68-76, 2008.
- 65) 小海宏之, 岡村香織, 岸川雄介, 園田 薫, 石井 博, 寺嶋繁典: 回想法観察評価尺度作成の試み,

- 老年精神医学雑誌, 19(1), 61-69, 2008.
- 66) 山本則子, 片倉直子, 藤田淳子, 篠原裕子, 園田芳美, 伴真由美, 鈴木祐恵, 金川克子, 石垣和子: 高齢者訪問看護質指標(認知症ケア)の開発-看護記録を用いた訪問看護実践評価の試み-, 老年看護学, 13(1), 73-82, 2008.
  - 67) 山本則子, 藤田淳子, 篠原裕子, 園田芳美, 伴真由美, 金川克子, 石垣和子: 高齢者訪問看護質指標(認知症ケア)の開発-訪問看護師の自己評価からの検討-, 老年看護学, 12(2), 52-59, 2008.
  - 68) 鐘ヶ江寿美子, 市丸徳美, 千々岩親幸, Richard Fleming, 小泉俊三: 日本語版 Care Planning Assessment Tool の作成と信頼性・妥当性の検討, 日本老年医学会雑誌, 45(3), 323-329, 2008.
  - 69) 遠藤英俊, 梅本充子, 佐竹昭介, 松山善次郎, 三浦久幸: 認知症高齢者におけるクリクトン高齢者行動評価尺度と介護負担尺度に関する研究, 老年精神医学雑誌, 19(5), 569-576, 2008.
  - 70) 小林裕人: 認知症高齢者を介護する家族自身の受診ニーズをとらえる-日本語版 Zarit 介護負担尺度短縮版(J-ZBI\_8)を用いた検討-老年精神医学雑誌, 19(6), 681-686, 2008.
  - 71) 河野禎之, 朝田 隆, 木之下徹, 安田朝子, 八森 淳, 稲葉百合子, 川嶋乃里子, 高桑光俊, 奈良岡美恵子, 楢林洋介, 西村知香, 平井茂夫, 水上勝義, 小阪憲司: アルツハイマー病患者における日本語版 EuroQol(EQ-5D, VAS)による QOL 評価の信頼性と妥当性の検討, 老年精神医学雑誌, 20(10), 1149-1159, 2009.
  - 72) 久野真矢: 改訂長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R), Mini-Mental State Examination(MMSE)と障害老人の日常生活自立度(寝たきり度), 認知症高齢者の日常生活自立度の関連について, 老年精神医学雑誌, 20(8), 883-891, 2009.
  - 73) 梅本充子, 遠藤英俊, 三浦久幸: 認知症高齢者における行動観察評価スケール NOSGER の検討(第1報)-信頼性の検討-, 老年精神医学雑誌, 20(10), 1139-1148, 2009.
  - 74) 鈴木千絵子, 横手芳恵, 中村 祐: アルツハイマー型認知症患者の日常認知・行動測定尺度の作成-介護付き住宅に入居中の高齢者を対象として-, 日本認知症ケア学会誌, 9(1), 18-29, 2010.
  - 75) 柴田由己, 安部幸志, 新井明日奈, 荒井由美子: 一般生活者を対象とした認知症家族の介護に対する感情尺度の作成, 日本老年医学会雑誌, 47(4), 315-322, 2010.
  - 76) 山本泰雄, 坂口隆一, 永田博一: 早期の認知機能低下を発見する新しいテスト- Simple Cognitive test - 日本老年医学会雑誌, 47(3), 25-242, 2010.
  - 77) 木島輝美, 林 裕子: 地域における特定高齢者に対するタッチエムを用いた認知機能評価の効果の検討, 日本認知症ケア学会誌, 9(1), 66-72, 2010.
  - 78) 鈴木みずえ, 水野 裕, 深堀敦子, 住垣千恵子, グライナー智恵子, 磯和勅子, 大城 一, 金森雅夫, Ate Dijkstra: 日本語版ケア依存度尺度(Care Dependency Scale ; CDS)の信頼性・妥当性の検討 老年精神医学雑誌, 21(2), 241-251, 2010.
  - 79) 石倉健二: 認知症高齢者の「笑い」にみる自他理解- MMSE 得点と社会的笑いの関係から-, 介護福祉学, 17(2), 115-123, 2010.

### Ⅲ-1-2)-(6)

- 1) 岡本多喜子: 老年期痴呆の老人に対する介護の中断および継続の要因, 社会老年学, (25),67-80, 1987.
- 2) 岡本多喜子: 「在宅痴呆性老人」の介護者の悩み, 老年社会科学, 10(1), 75-90, 1988.
- 3) 野口典子: 痴呆性老人の家族介護をめぐる諸問題: 東京都における調査の結果から, 厚生指標, 35(4), 9-14, 1988.
- 4) 中谷陽明, 東條光雅: 家族介護者の受ける負担: 負担感の測定と要因分析(痴呆性老人の家族介護に関する研究), 社会老年学, (29), 27-36, 1989.
- 5) 坂田周一: 在宅痴呆性老人の家族介護者の介護継続意志(痴呆性老人の家族介護に関する研究), 社会

老年学, (29), 37-43, 1989.

- 6) 冷水豊：痴呆性老人の家族介護に伴う客観的困難の類型(痴呆性老人の家族介護に関する研究), 社会老年学, (29), 16-26, 1989.
- 7) 佐藤豊道：痴呆性老人の特徴と家族介護に関する基礎的分析：特集への序論(痴呆性老人の家族介護に関する研究), 社会老年学, (29), 3-15, 1989.
- 8) 下垣光, 加藤伸司, 藤森和美, 今井幸充, 長谷川和夫：痴呆性老人を抱える介護者の意識と態度, 老年社会科学, 11, 249-263, 1989.
- 9) 福島道子, 渋谷優子, 北島正子：痴呆性老人をかかえる家族のインフォーマルな社会的支援：都市・農村・離島の比較から, 日本看護科学学会誌, 11(2), 55-63, 1991.
- 10) 和気純子, 矢富直美, 中谷陽明, 冷水豊：在宅障害老人の家族介護者の対処(コーピング)に関する研究(2)：規定要因と効果モデルの検討：社会福祉援助への示唆と課題, 社会老年学, (39), 23-34, 72, 1994.
- 11) 藤野真子：在宅痴呆性老人の家族介護者のストレス反応に及ぼすソーシャル・サポートの効果, 老年精神医学雑誌, 6(5), 575-581, 1995.
- 12) 鶴田聡：老年期痴呆患者の在宅介護に対する介護者の心理的態度的変化, 老年精神医学雑誌, 6(6), 737-753, 1995.
- 13) 阿部俊子, 山本則子, 鎌田ケイ子, 山田ゆかり：痴呆症高齢者の在宅介護者のストレスに対する資源の軽減効果, 老年精神医学雑誌, 9(12), 1489-1499, 1998.
- 14) 天田城介：在宅痴呆性老人家族介護者の価値変容過程, 老年社会科学, 21(1), 48-61, 1999.
- 15) 一宮厚, 井形るり子, 尾籠晃司, 井形朋英：在宅痴呆高齢者の介護者における介護の負担感とQOL：WHO/QOL-26による検討, 老年精神医学雑誌, 12(10), 1159-1167, 2001.
- 16) 大川美佐子, 中村貴志, 野瀬真由美, 正宗千絵, 吉木景子, 杉村美佳, 高橋三津雄, 山田達夫：もの忘れ外来を受診したアルツハイマー型痴呆高齢者を介護する在宅介護者の精神的健康に関する検討, 日本痴呆ケア学会誌, 2(2), 133-139, 2003.
- 17) 兵藤好美, 田中宏二, 田中共子：介護ストレス・サポートモデルの検討：寝たきり・痴呆性高齢者の場合, 健康心理学研究, 16(2), 30-43, 2003.
- 18) 中原 純：痴呆性高齢者の家族介護における負担感：介護者の態度と介護状況を通して, 高齢者のケアと行動科学, 10(2), 71-76, 2005.
- 19) 北村世都, 時田学, 菊池真弓, 長嶋紀一：認知症高齢者の家族介護者における家族からの心理的サポートニーズ充足状況と主観的QOLの関係, 厚生指標, 52(8), 33-42, 2005.
- 20) 日野由佳子, 河野保子, 赤松公子, 棚崎由紀子：在宅アルツハイマー病患者の主介護者の介護負担感に影響を及ぼす要因：介護状況と認知症重症度に焦点をあてて, 高齢者のケアと行動科学, 11(2), 36-44, 2006.
- 21) 松本啓子, 高井研一, 中嶋和夫：在宅認知症高齢者の家族介護者におけるニーズと精神的健康との検討, 日本看護研究学会雑誌, 29(4), 41-47, 2006.
- 22) 小澤芳子：家族介護者の抑うつに関する研究, 高齢者のケアと行動科学, 13(1), 23-31, 2007.
- 23) 永井真由美, 小野ミツ：認知症高齢者を介護する高齢介護者の対処様式の特徴, 老年看護学, 12(1), 49-54, 2007.
- 24) 鹿子供宏, 上野伸哉, 安田肇：アルツハイマー型老年認知症患者を介護する家族の介護負担に関する研究：介護者の介護負担感, バーンアウトスケールとコーピングの関連を中心に, 老年精神医学雑誌, 19(3), 333-341, 2008.
- 25) 櫛木てる子, 内藤佳津雄, 長嶋紀一：介護結果に対する原因帰属が介護負担感に及ぼす影響：認知症介護をしている家族の場合, 老年社会科学, 29(4), 493-505, 2008.
- 26) 八森淳, 安田朝子, 本間昭, 朝田隆, 池田学, 河野禎之, 稲葉百合子, 木之下徹, 内海久美子, 奥村歩, 川

- 嶋乃里子,川畑信也,繁田雅弘,繁信和恵,高橋智,田北昌史,玉井顯,長田乾,橋本衛,平井茂夫,藤沢嘉勝,水上勝義,山田達夫,小阪憲司:認知症医療によるアルツハイマー型認知症の本人および介護者の包括的健康関連 QOL 指標の変化, 老年精神医学雑誌, 20(9), 1009-1021, 2009.
- 27) 遠藤忠,蝦名直美,望月正哉,小野寺敦志,長嶋紀一:要支援ならびに要介護高齢者を居宅で介護している家族介護者の介護負担と主観的 QOL に関する検討:要介護度別と認知症の有無による違いについて, 厚生指標, 56(15), 34-41, 2009.
- 28) 大浦麻絵,鷺尾昌一,和泉比佐子,森満:介護保険制度導入4年目における福岡県遠賀地区の要介護高齢者を介護する家族の介護負担感, 日本老年医学会雑誌, 42(4), 411-416, 2005.
- 29) 小林裕人:認知症高齢者を介護する家族自身の受診ニーズをとらえる:日本語版 Zarit 介護負担尺度短縮版(J-ZBI\_8)を用いた検討, 老年精神医学雑誌, 19(6), 681-686, 2008.
- 30) 田中晴佳,武地一,杉山博通,藤本理恵子,木下彩栄,櫻庭繁:若年認知症の患者が診断を受けるまでの家族の行動プロセス:早期診断につなげるために必要な支援の考察, 日本認知症ケア学会誌, 9(3), 507-518, 2010.
- 31) 杉山美香,矢富直美,宇良千秋,本間昭:地域高齢者家族の痴呆の告知に対する態度, 日本痴呆ケア学会誌, 2(2), 140-149, 2003.
- 32) 二神真理子,渡辺みどり,千葉真弓:施設入所認知症高齢者の家族が事前意思代理決定をするうえで生じる困難と対処のプロセス, 老年看護学, 14(1), 25-33, 2010.
- 33) 山下真理子,小林敏子,松本一生,藤野久美子:アルツハイマー病の病名告知と終末期医療に関する介護家族の意識調査, 老年精神医学雑誌, 15(4), 434-445, 2004.
- 34) 山下真理子,小林敏子,松本一生,小長谷陽子,中村淳子:介護家族の視点からみた認知症高齢者の終末期治療:その現状と課題, 日本認知症ケア学会誌, 6(1), 69-77, 2007.
- 35) 岡本多喜子:精神症状に問題のある老人の介護者にみる社会福祉サービスの利用要因(痴呆性老人の家族介護に関する研究), 社会老年学, (29), 44-50, 1989.
- 36) 岡本恵美,村嶋幸代,斉藤恵美子:痴呆性老人とその介護者へのデイケアの意義:デイケアのある日と無い日との比較から, 日本公衆衛生雑誌, 45(12), 1152-1161, 1998.
- 37) 新名理恵,本間昭:町田市における介護保険制度施行前後での在宅介護者のストレス反応の変化, 老年精神医学雑誌, 13(5), 517-523, 2002.
- 38) 塩山(都村)尚子:痴呆性高齢者の家族介護者へのストレスリダクションプログラムの開発, 日本痴呆ケア学会誌, 3(2), 214-221, 2004.
- 39) 沖田裕子,久世淳子,奥村由美子,水野裕,井川美由紀,大栗功,橋本直季:老人性痴呆疾患センター利用状況からみた痴呆性高齢者および家族に必要な支援のあり方, 日本痴呆ケア学会誌, 3(2), 193-202, 2004.
- 40) 田所正典,山口登,小野寺敦志,新妻加奈子,伊藤幸恵,森嶋友紀子,松尾素子,高澤みゆき,川合嘉子,荻野あずみ,関野敬子,渡部廣行,青葉安里:アルツハイマー型痴呆患者ならびに主介護者の生活支援を目的とした非薬物療法的介入の試み:「もの忘れケア教室」の6か月後の有用性, 老年精神医学雑誌, 16(4), 479-487, 2005.
- 41) 佐藤弘美,金川克子,天津栄子,田高悦子,酒井郁子,細川淳子,高道香織,伊藤麻美子:認知症高齢者のグループ回想法場面の編集映像がもたらす家族やケアスタッフへの効果, 老年看護学, 10(1), 105-115, 200.
- 42) 宮本美佐(筑波大学 大学院人間総合科学研究科),奥野純子,柳久子,戸村成男:痴呆入所者の家族と施設職員の交流 家族の交流に関する意識とその関連要因, プライマリ・ケア, 28(1), 14-18, 2005. 28(1), 14-18, 2005.
- 43) 沖田裕子,岡本玲子:若年認知症の家族が必要としている支援内容とその時期, 日本痴呆ケア学会誌, 5(3), 480-491, 2006.

- 44) 松田千登勢：短期入所を利用する認知症高齢者の家族とケア提供者が伝えたい情報，老年看護学，12(2)，68-74，2008.
- 45) 上城憲司，中村貴志，納戸美佐子，荻原喜茂：デイケアにおける認知症家族介護者の「家族支援プログラム」の効果，日本認知症ケア学会誌，8(3)，394-402，2009.
- 46) 金 圓景：韓国における認知症高齢者の家族会のサポートグループとしての機能，日本の地域福祉，23，106-117，2010.
- 47) 鈴木亮子，森明子，小長谷陽子：若年認知症の人の家族を支援するうえでの課題，日本認知症ケア学会誌，9(1)，73-82，2010.
- 48) 湯原悦子，尾之内直美，伊藤美智予，鈴木亮子，旭多貴子：認知症の人を抱える家族を対象にした電話相談の役割：認知症の人と家族の会愛知県支部が行う電話相談5,300件の分析から，日本認知症ケア学会誌，9(1)，30-43，2010.
- 49) 小西慶二：認知症ケアにおける医療福祉従事者と家族介護者の問題認識 家族介護者に対する訪問看護師の支援を通じて，北海道医学雑誌85(1)，67-78，2010. 85(1)，67-78，2010.
- 50) 沖田佳代子：痴呆性高齢者の介護における倫理的諸問題：家族介護者による自由記述回答の内容分析，社会福祉学，40(1)，190-208，1999.
- 51) 大島千帆，児玉桂子，後藤隆，足立啓，三宅貴夫：痴呆性高齢者の在宅環境整備に関する研究：家族介護者の自由記述に基づく住居配慮の次元，日本痴呆ケア学会誌，3(1)，30-40，2004.
- 52) 寺川智浩，玉井顯，池田学：認知症高齢者の自動車運転に関するアンケート調査：アルツハイマー病患者の自動車運転に対する患者と家族の認識の乖離に関する検討，老年精神医学雑誌，20(5)，555-565，2009.
- 53) 河野禎之，安田朝子，木之下徹，稲葉百合子，川嶋乃里子，高桑光俊，奈良岡美恵子，植林洋介，西村知香，平井茂夫，水上勝義，朝田 隆，小阪憲司：アルツハイマー型認知症の本人とその家族が経験する経済的な機会損失に関する研究，老年精神医学雑誌，21(11)，1237-1251，2010.
- 54) 土井由利子，尾方克巳：痴呆症状を有する在宅高齢者を介護する主介護者の精神的健康に関する研究，日本公衆衛生雑誌，47(1)，32-46，2000.
- 55) 右田周平，服部ユカリ：痴呆性高齢者の家族介護の肯定的側面に関する因子構造とその関連要因，老年看護学，6(1)，129-137，2001.
- 56) 小林陽子：痴呆症の妻を介護する高齢男性の介護認識とその影響要因，老年看護学，9(2)，64-76，2005.
- 57) 小澤芳子，戸村成男：認知症高齢者の介護者による介護評価，プライマリ・ケア，28(3)，149-154，2005. 28(3)，149-154，2005.
- 58) 山田裕子，武地一：もの忘れ外来通院患者の家族介護者の認知症と介護の受け止めに関する研究，日本痴呆ケア学会誌，5(3)，436-448，2006.
- 59) 標美奈子：回想的に語られた介護体験プロセス：痴呆性老人の家族介護者の会役員の場合，保健医療社会学論集，(12)，47-57，2001.
- 60) 鈴木亮子：認知症患者の介護者の心理状態の移行と関係する要因について：心理的援助の視点からみた介護経験，老年社会科学，27(4)，391-406，2006.
- 61) 安武綾，五十嵐恵子，福嶋龍子，小玉敏江：認知症高齢者の家族の体験：症状発現から診断まで，老年看護学，12(1)，32-39，2007.
- 62) 朴偉廷，遠藤忠，佐々木心彩，時田学，長嶋紀一：認知症高齢者を居宅で介護する家族介護者の主観的QOLに関する研究：介護に関する話し合いや勉強会への参加経験や参加に対する意思との関連性について，厚生学の指標，54(4)，21，2007.
- 63) 渡辺千枝子：認知症高齢者を介護する嫁の介護意識の変容，日本看護研究学会雑誌，31(4)，75-85，2008.

- 64) 池添志乃,野嶋佐由美:生活の再構築に取り組む家族の介護キャリアの形成困難における悪循環, 家族看護学研究, 14(3), 20-29, 2009.
- 65) 池添志乃,野嶋佐由美:生活の再構築に取り組む家族介護者の介護キャリア, 家族看護学研究, 15(2), 107-116, 2009.
- 66) 杉原百合子,山田裕子,武地一:認知症高齢者の家族が行う意思決定過程と影響要因に関する研究:家族介護者の語りの介護開始時期からの分析, 日本認知症ケア学会誌, 9(1), 44-55, 2010.
- 67) 浅川典子,高崎絹子,旭俊臣,吉山容正:在宅痴呆性老人の主介護者の介護負担感の関連要因:日常問題となる行動との関連を中心として, 日本在宅ケア学会誌, 2(1), 32-40, 1999.
- 68) 亀田典佳,服部明德,西永正典,土持英嗣,中原賢一,大内綾子,松下哲,金丸和富,山之内博,折茂肇:バーンアウト・スケールを用いた老年者介護の家族負担度の検討(第3報):アルツハイマー型老年痴呆における痴呆問題行動・身体障害度と家族介護負担度の関連, 日本老年医学会雑誌, 38, 382-387, 2001.
- 69) 大西丈二,梅垣宏行,鈴木裕介,中村了,遠藤英俊,井口昭久:痴呆の行動・心理症状(BPSD)および介護環境の介護負担に与える影響, 老年精神医学雑誌, 14(4), 465-473, 2003.
- 70) 水島ゆかり,前田修子,斎藤好子:在宅痴呆性高齢者の行動障害に対する介護者の認識:日本とイギリスにおける一地方の比較から, 日本地域看護学会誌, 7(2), 49-54, 2005.
- 71) 武地一,山田裕子,杉原百合子,北徹:もの忘れ外来通院中のアルツハイマー型痴呆患者における行動・心理学的症候と認知機能障害, 介護負担感の関連について, 日本老年医学会雑誌, 43(2), 207-216, 2006.
- 72) 東野定律:要援護高齢者の行動障害に関連する要因に関する研究, 日本痴呆ケア学会誌, 5(3), 449-456, 2006.
- 73) 北村世都,時田学,菊池真弓,長嶋紀一:要介護者にみられる軽度のBPSDと家族介護者の主観的QOLの関連:BPSDの特徴は家族介護者のQOLを予測できるか, 老年社会科学, 27(4), 416-426, 2006.
- 74) 鈴木聖子:特別養護老人ホーム初任介護職員の認知症高齢者ケアにおける困難内容の分析, 日本認知症ケア学会誌, 9(3), 543-551, 2010.
- 75) 杉浦圭子,伊藤美樹子,三上洋:家族介護者における在宅認知症高齢者の問題行動由来の介護負担の特性, 日本老年医学会雑誌, 44, 717-725, 2007.
- 76) 檜木てる子,内藤佳津雄,長嶋紀一:在宅における認知症の行動障害が介護への自己評価と介護負担感に及ぼす影響, 日本認知症ケア学会誌, 6(1), 9-19, 2007.
- 77) 遠藤英俊,梅本充子,佐竹昭介,松山善次郎,三浦久幸:認知症高齢者におけるクリクトン高齢者行動評価尺度と介護負担尺度に関する研究, 老年精神医学雑誌, 19(5), 569-576, 2008.
- 78) 太田喜久子:痴呆性老人と主たる介護者との家庭における相互作用の特徴:痴呆性老人の「確かさ」へのこだわりにより焦点をあてて, 日本看護科学学会誌, 14(4), 118, 1994.
- 79) 天田城介:痴呆性老人と家族介護者における相互作用過程:「痴呆性老人」と「家族」の視点から解読する家族介護者のケア・ストーリー, 保健医療社会学論集, (10), 38-55, 1999.
- 80) 西田公昭,山田紀代美:家族介護者のコミュニケーションスキルとその関連要因の検討, 老年精神医学雑誌, 18(5), 531-539, 2007.
- 81) 岡本多喜子:老年期痴呆の老人の扶養に関する分析枠組み, 社会福祉学, 27(1), 51-79, 1986.
- 82) 金愛利,竹尾恵子,木村恵子:韓国における在宅老人の痴呆症状と介護状況に関する研究, 日本看護科学学会誌, 13(2), 37-44, 1993.
- 83) 森文子,久米和興:痴呆患者介護者の介護負担と外来看護に求められる機能, 日本看護研究学会雑誌, 22(1), 27-37, 1999.
- 84) 平野憲子,加藤欣子,佐伯和子,和泉比佐子:脳血管性痴呆とアルツハイマー型痴呆高齢者の受療における介護者の認識, 日本地域看護学会誌, 3(1), 108-114, 2001.

- 85) 臼井樹子, 本間昭: 在宅痴呆性高齢者の介護者を対象とした VTR 調査の試み, 老年精神医学雑誌, 13(3), 307-313, 2002.
- 86) 藤原佳典, 天野秀紀, 高林幸司, 熊谷修, 吉田祐子, 吉田裕人, 森節子, 渡辺修一郎, 森田昌宏, 永井博子, 新開省二: 地域在宅高齢者における認知機能低下者の生活機能の評価: 本人と家族の評価における乖離の関連要因, 日本老年医学会雑誌, 40(5), 487-496, 2003.
- 87) 鹿野由利子, 花上憲司, 木村哲朗, 本間昭: 痴呆の早期受診はなぜ難しいのか: 家族からみた障壁要因と情報提供の必要性, 日本痴呆ケア学会誌, 2(2), 158-181, 2003.
- 88) 原等子, 中島紀恵子: 痴呆性高齢者の家族介護時間の特性: 家族介護主担者の時間的様相, 老年看護学, 7(2), 70-82, 2003.
- 89) 本間昭: 痴呆性高齢者の介護者における痴呆に対する意識・介護・受診の現状, 老年精神医学雑誌, 14(5), 573-591, 2003.
- 90) 前田修子, 水島ゆかり, 斎藤好子: 在宅痴呆性高齢者の介護者の悩みと希望する支援の日英比較, 日本在宅ケア学会誌, 7(2), 4-42, 2004.
- 91) 渡邊久美, 住吉和子, 森本美智子, 岡野初枝: 精神疾患としての痴呆患者を抱える家族への社会資源の導入に関する訪問看護師の認識, 日本在宅ケア学会誌, 8(1), 58-64, 2004.
- 92) 宮上多加子: 痴呆性高齢者の家族における介護実践力に関する研究, 老年社会科学, 25, (4), 450-460, 2004.
- 93) 竹内志保美, 鈴木みずえ, 矢富直美, 福岡欣治, 大山直美: 痴呆専門外来患者の家族の介護と痴呆の受容, 老年精神医学雑誌, 15(5), 527-537, 2004.
- 94) 西山みどり: とともに暮らす高齢者の認知症発症に伴う主介護者の生活再編成, 老年看護学, 9(2), 85-91, 2005.
- 95) 山本千紗子, 星旦二, 巴山玉連, 櫻井尚子, 岡戸順一, 藤原佳典: 家族が行う認知症判断と生存予後および生存に関連する要因, 日本認知症ケア学会誌, 4(1), 40-50, 2005.
- 96) 宮上多加子: 家族の痴呆介護実践力の構成要素と変化のプロセス: 家族介護者16事例のインタビューを通して, 老年社会科学, 26(3), 330-339, 2005.
- 97) 加藤典子, 麻原きよみ: 住民グループのメンバーが活動を地域に発展させていくプロセス: 認知症高齢者(痴呆性高齢者)の介護者グループに焦点を当てて, 日本地域看護学会誌, 7(2), 13-19, 2005.
- 98) 永井眞由美: 認知症高齢者の家族介護力評価とその関連要因, 老年看護学, 10(1), 4-40, 2005.
- 99) 標美奈子: 認知症者介護経験と家族の会役員活動をつなぐ内面的理由, 老年看護学, 10(1), 116-123, 2005.
- 100) 野村美千江, 大名門裕子: 農村に暮らす初期痴呆高齢者と配偶者の生活特性とその全体像, 日本看護研究学会雑誌, 28(1), 91-100, 2005.
- 101) 奥村由美子, 久世淳子, 柴山漠人: 要介護認定者の介護者における痴呆症についての認識と相談・受診の状況, 老年精神医学雑誌, 16(2), 229-242, 2005.
- 102) 廣瀬春次: 在宅の認知症患者を介護する家族の予期悲嘆, 日本看護研究学会雑誌, 29, (1), 57-65, 2006.
- 103) 奥村由美子, 久世淳子, 樋口京子: 在宅高齢者の介護に必要な情報への充足感に関連する要因: 身体の障害度と認知症度の違いによる比較, 日本在宅ケア学会誌, 11(1), 78-86, 2007.
- 104) 梶原弘平, 横山正博: 認知症高齢者を介護する家族の介護継続意向の要因に関する研究, 日本認知症ケア学会誌, 6(1), 38-46, 2007.
- 105) 羽生春夫, 佐藤友彦, 赤井知高, 酒井稔, 高崎朗, 岩本俊彦: 老年期認知症患者の病識: 生活健忘チェックリストを用い, 介護者を対照とした研究, 日本老年医学会雑誌, 44, 463-469, 2007.
- 106) 安部幸志, 荒井由美子: 一般生活者を対象とした認知症の症状に対する援助希求行動尺度の作成とその信頼性および妥当性の検討, 老年精神医学雑誌, 19(4), 451-160, 2008.

- 107) 柴田由己, 安部幸志, 新井明日奈, 荒井由美子: 一般生活者を対象とした認知症家族の介護に対する感情尺度の作成, 日本老年医学会雑誌, 47(4), 315-322, 2010.
- 108) 廣瀬春次, 生田奈美可: 在宅の認知症患者を介護する家族の予期悲嘆とその関連要因の質的研究, 日本看護研究学会雑誌, 33(1), 45-56, 2010.

#### IV 考察

- 1)再掲 I - 3)
- 2)再掲 I - 4)